1965　ー　2013

北岡冬木　全詩集　目次

まえがきにかえて１０代前期の**俳句**３篇
北岡冬木論　家常茶飯神話詩　寒河江光著者選別抜粋詩５篇＋差し込み唄

第１詩集　処女詩集・蒼い地帯
宇宙は雨に濡れて
序奏
朝日は沈んでいく
（夢）
ステージ＊
乾いた義眼
追悼詩・蒼い地帯
四月の幻想に纏わる四つの章
真昼の祭壇に関する未完の章
午后の洗礼
目には（口には）
曇った春の瞳孔
初期詩群
１．水色への哀愁
黒い樹間の朱い珠
死人の顔
春宵桜
東京砂漠の伝説
水色への哀愁
夜はうたわない
太陽への航路
２．絶望の奏でるエレジーたち
灯籠流し
夜の郊外電車
曇った鏡を拭いてみるには
昨日に寄せて
秋の瞑想
ある覚醒

排泄と喪失
真夜中のエアポート（逃亡）
３．リリカルな神話「聖女たち」
秋の蝶
忘れられた病室の少女へ
冬の原点
冬の空（・）海へ
白い朝の聖女像
４．イマジネーション・都市１９７０
幻想都市
Ｒ通りの悲惨な青春
太陽は健康的に病気をしています
ナイーヴな欲情

第２詩集・失速する魚群
秋の入口
秋の解読
序（プロローグ）
◎アキ・の・解読
◎罪状そして解読のヒント
小詩群・偏光感受
世界（宣誓）
弦薔薇に寄せる妄想
Ｈ氏の奇怪な夢
破綻走行
（透明な羽根に満ちた小宇宙）
Ｈ氏の初日の出
蛾城
落日落日（落日）
夏眠
まつりへ
（一）
（二）
（三）
（四）
（五）

空腹なる詩季

Birthday.
Sabbath.
２１ｓｔ　Summer
Eye.
At Harajuku
Autumn,
Love.
Eve.

第３詩集・南十字星の都から

ぺんぐいんつあー
花盛り
アジアは懐かしき
アフタヌーンティー
秋桜の咲く宇宙にいて
砂丘の星
ダーウィン
干満の
春の３行詩
夏の３行詩
秋の３行詩
南回帰線巡礼歌

第４詩集　１００連詩ごっこ（対詩：寒河江光）

１から１００
連詩からの抜粋歌

第５詩集・懸垂する魚群

半世紀の紙屑桜
逆巻く逢瀬
懸垂する魚群
地球の超期記憶
海から
海の時間
難破船の還る日

海と少女（挿し込み歌）

第６詩集　花の詩集

ローダンセの記憶
サイネリアの透明な髣髴に捧げる詩
お見舞い（挿し込み歌―寒河江光）
紫陽花の恋人（挿し込み歌）
とびきり高い向日葵
コスモスの地平線
薔薇が馨る夜
ブルーローズ
ホワイトローズ
杏子の樹の下で
四月の風のJUN
四月の風のJun（挿し込み歌）
ラベンダー畑消去
（あの夏）

血だらけの花園
生家のマジックガーデン（自画像）
白い朝
渚の記憶
少年と少女
夕陽の迷い
月の笑う晩舟は出る（挿し込み歌）

第７詩集　ラストエンジェル

一条の虹
ファティマの記憶
秘密の蝶道
南風を待つ大陸
世界は夜夜
春がドアの外で
春、悦楽の天使
前触れもなく
風の吹く宇宙へゆこう
春の予感

逆暦（さかごよみ）
冬の紫陽花
雪解け待ちの国

第８詩集　死滅する魚群
残酷な桜
死の見える谷間
震災の後に
魚群の挫折
真っ黒な夏
秋が橋の向こうで
詩は世界を巡る
死後の惑星

あとがき　北岡冬木
真の履歴書

まえがきにかえて

１０代前期の俳句３篇

夕焼けに
　熟れ柿映えて
　　明日も晴れ

満月に
　大鉄塔の
　　シルエット

枯れ芝生
　カンナの赤が
　　ただ光る

北岡冬木論　寒河江光

家常茶飯神話詩

詩人の誕生は宿命に負う他は無い。
かといってそれは亦少しも特別の事態ではない。
私達の一挙手一投足とは全て私達の宿命の分岐であるのだから。
どちらに転んでも差し当たって違いは無いように見える一挙手も在れば、生死の境を分きかねない一投足も在る。
どんなに然りげ無い一挙手も殆ど投げやりの一投足も一回きりで絶対的な宿命の分岐なのだ。
生物は無数のポテンシャルを持って生きてはいるが、その発現は唯一つのトポスとテンポスの組み合わせによる絶対的な一回性に支配されている。

STAP で夢の若返りが可能です
ああなんてゆるキャラな０　B
百束先生に顔替えてもらって
どっかで御払いしてもらって
どうぞ出直しなすって下さい

運命に否も応も無いないじゃないか。

どんな人間でも運命の取り返しのつかなさを前にしては嘆声を上げてそれに標するしか無いのだが、其の一々の曲がり角に、嘆声どころでは無い、かなり手の込んだ言葉の道標を当たり前のように立てる事に就いて、日本人ほどまめな人種は無いようだ。
全ての新聞に短歌や俳句の些か過大な投稿欄があり、夫々の結社に集う人を含めて、総人口の何分の一かにのぼる日本人が詩的言語を日常茶飯のものとして繰っている、などという事を聞いて頭の混乱しない欧米の「文化人」はいない。国民というものに関する彼等の前提に狂いが生ずるか、詩の言葉と日常の言葉との間の彼等の自明な境界にひびが入ってしまうのである。
支那人や朝鮮人が欧米でするプロパガンダを日本人は毫も恐れる必要は無い。そういうレトリックをどう理解したら良いか欧米人は寧ろよく鍛えられているからだ。しかし、うっかりすると自国の総人口より遥かに多い日本人が神話を語る日常を生きているのかも知れないなどという事態は遥に彼等の文明理解を

超える。どちらが遂に眞の畏敬の対象となるか、語る迄もあるまい。歴史のガラパゴスは慈しむべきかな、である。
にもかかわらず、日本もプロパガンダ戦に加わるべし、などという官僚や政治家のゆるキャラも後を絶たない。油断は出来ない。
津波の後の松島を訪れて舟で遊覧してみると、どんな瑣細な岩一つにも名前があり、来歴があって句の一句、歌の一首、果ては戯曲一篇にも及ぶ物語が随き従い遊弋しているのが解って慄然とする。ガラパゴスの威力、八百万の神力である。ワーとかキャーとかしか云わない退化のゆるキャラには、語り継がれ、歌い継がれるべき神域を軽々に譲ってはなるまい。

４０年以上も前、百束比古という純正の神の名を持つ人間に初めて出会った頃は、私もこんな風に考えていなかった。
五、七、五を拭っても拭っても落ちない昨日の垢のように思っていた。現代の詩は当然新しいリズムや形式を持たねばならないという強迫観念に囚われていた。
俗人が紙の上で鉛筆を転がしても岩戸は開かなかったが、神が俗塵の上に電子楽器を響かせると光明が差した。
私達が創設した『海』という劇団は極めてユニークで活発なレパトワの航跡を１０年以上に渉って残した。
百束比古がステージに立つことは多くはなかったが、少ないその歌いの現場は正に光臨の場であって、そこに居合わせることが出来たことは我が青春の至福であったと言っていい。あれは神が自ら禁制を破って自らに捧げた吉言に違いなく、今でも時に私の胸底に響いて祝いと励ましを与えてくれているように思う。

多年の空白を経て、「北岡冬木」なる詩人の全詩集草稿を送られ、贅言を求められた時、私はやや不安を覚えていた。
この数年来、私は鷗外森林太郎という医にして詩の巨像との格闘を余儀なくされて来た為に、遂に近代日本の科学史と詩歌史の從來像を見直さずには居られなくなっているからである。詩は神話と叙事詩がその究極であって、詩人はそこを目指すか否かでその命数を異にする。
今北岡の詩を改めて読み返してみると、驚く程それが神話的であったことに気付く。北岡が家常の日本語で書く詩人であるにも関わらず、神の際限なき欲望に従うかのように、世界神、更に宇宙神にも呼びかけているようだ。
これは６０歳の還暦を経て生まれ変わった詩人の今後を占う上での吉兆である。

北岡冬木よ、是非壮大な叙事詩、戯曲詩に、唯当たり前のように挑んでもらいたい。百束比古の仕事が、世界に日本の国力を知らしめて来たことに、それは必ず匹敵する。家常茶飯の神話詩、改めて期待している。

平成二十六年六月七日　　寒河江光

著者選別抜粋詩

蛾城

また夜明けの訪れ、既に幾日、眠りの無い日々が訪れ去っただろうか、と記憶を手繰る、あの青い静脈の、透けて見える太陽がまた、風船のように昇ってくるかと思うと、ぞっとするから、私は耳穴を塞いで、頭蓋に反響する、遠い日の唄の残骸を捜していたり、それに腐心すると瞼を閉じて、暗黒の空間を独り散策する、と恐らくは遥か意識の彼方に、微かな光の地点が発見される、或いは蜃気楼か、と双眼鏡を目に当てれば、そいつは城郭なのだ、近づこうとして歩いたら、何ヶ月もの時間が経ったが、城門に立ったとき、私はもう城郭の中に居た、ロジネスな空が在って、シラスを耕した畑には、デリケイトな植物を栽培する男が居て、尋ねるとそれを、猜疑心と名付けたり、更に聴いていると、第六日曜日に礼拝堂へ押し掛けてくる二日酔いの女が居て、この生命たちに南方の毒液を注いでゆくのだと嘆いたが、その美しい仕事の価値を知らない者を、私はひどく哀れに感じた、冷たい春の午後だった、塔のてっぺんで、盗聴器が光った、なぜにパラノイアは発狂したか、という稚拙な条理に対して、私は今日的には、非常に冷淡である、それが応答でもあるが、とにかく全く水が不足していて、言語までが風化されてゆく。

（第２詩集より）

難破船の還る日

いつ喪くしたのかも忘れてしまった追憶公園の
プラタナスが噪ぐ究極の秋空の碧い眼底から
もうすっかり忘却していた難破船が
じつは予定通りに還ってくる日が遂に
やってくるのだもうじき
あの遊び疲れた公園の友達と

夕食を告げにくる妹たちの
家で待つ祖母や父母
みんなが連れて行かれたあの日
一人佇んで呆然といつまでも待ち続けた長い夜
あれから太陽はどれくらい廻ったのだろうか
すべては夢だった途方もなく長い旅をした
ブランコは囁く
漕いでも漕いでも届かない夢を
滑り台は呟く
降りても降りてもまた昇れと
砂場は嘯（うそぶ）く
掘っても掘っても未来は見えないよと
それでも友達より多く遊ばなくては大人になれない
どうしてそんなに大人にならなくてはいけないのだ
子供のまんまで逝った「新聞少年」は
回旋塔にぶら下がったまんま寂しく問いかけ消えた
そうすべては難破船の還る日のために
誰もがこうやって辛い旅をしなくてはならないのだ
積み忘れたおまえを屹度迎えにくるから
あの胎内で耳にした麻断の音階とともに
ああ陶酔の馥郁たる腐臭を漂わせ
ほら乳色の蜃気楼の彼方から
もうじき難破船が還るよ

注：中二の冬新聞配達中に
交通事故で夭折した級友高橋邦夫君の魂に捧ぐ。
，
（第５詩集より）

血だらけの花園

すべての花は凶器を自らに突きつけている
季節は七月屋上遊園の回転木馬から
痺れやかな音楽が流れてくる日
マネキン人形は悉く自爆して
ぬめぬめした内臓を露出して羅列する
花畑は血にまみれた謝肉祭

のたうつ心臓総ゆる街辻に配置され
回収し難い真昼の見物渋滞
片づけ忘れた未消化の性欲が
再びこの躯に真紅の花粉を噴霧するか
その限り凶器はすべての花弁に突き刺さっている
やがて花園は血に喘ぎ呻吟するだろう
またしても終了しない祭儀が始まったのだから
（第６詩集より）

渚の記憶

地球の朝が始まった渚
夢も希望も未来も忘れて
真空のときに浸る瞬間
心の揺らぎは砂浜にさざ波を巡らす
そんな朝もあったね
まだ新しい体を洗う
二人で恥じらう花園の余韻
このまま地球が滅びても
何の悔いもないと君は呟いた
あああれから何回夏は過ぎたのか
すっかり忘れてしまった
人は自分を隠して死に地を探す
単調な日日の繰り返しに忘れる
瑞瑞しいあの瞬間を
もう一度渚に還れ！
まだ渚がそのままであれば
だがおまえは変わってしまった
おまえが変われば渚も変わる
それでもいい
せめて渚の記憶に戻れれば
天空を廻っていたおまえも降りる
至福のときがわたしを包む
そしてこの世は終る
最期の夏
（第６詩集より）

薔薇が馨る夜

ある日空からエンジェルヘアーと見紛うあたたかい雪が降った
誰もが踊りながら飛び出したら１０年後にはみな死んだ
よい目にあうと滅びが早いエンジェルダストはよがりの毒だと
邪教の医師団は耳打ちして絶えたそれから春が来ると体が溶けたい
でも交接の後の悔恨は辛いよ息をしようと窓を開けたらああ薔薇が馨る夜

（第６詩集より）

月の笑う晩舟は出る（挿し込み歌・曲あり）

たれかおしへてくださひ　どこのみなとから　ふねはでるの
たれかおしへてくださひ　ぼくものれますか　そのふねに
たれかこたへてくださひ　つきのわらふばん　ふねはでる
どこかのみなとから　どこかのせかひへ　ふねはでる

たれかかへしてくださひ　あしたといふひを　ぼくのてに
たれかかへしてくださひ　けれどもうおそひ　ふねはでる
たれかさけんでくださひ　つきのわらふばん　ふねはでる
どこかのみなとから　どこかのせかひへ　ふねはでる

みんなうたはてくださひ　ぼくがうれしそふに　てほふるとき
みんなうたはてくださひ　ぼくがかなしそふに　てほふるとき
たれかつたへてくださひ　にどとかへらない　ふねのこと
ぼくのちちやははに　どふかゆるして　くださひと

（１９７０年２０歳時制作）

第１詩集　蒼い地帯

北丘冬志（現北岡冬木）詩集復刻版

２０才時の処女詩集

製作期間：１７歳−１９歳

１９７０年１月１５日発行

宇宙は雨に濡れて

序奏

宇宙は雨に濡れて・・・
あなたの胸の大理石柱はみず色に光ります
（天を観る幼児の瞳孔が私の胸にぽっかりと開いた）
けれども死骸はどこまでも続いているのです
植物の死臭は天に登ります
あらゆる死がある、雨は注いでいる・・・
ああ、あなたの硝子の乳房を戦慄さす
こすもぞーん大宇宙線の驟雨！
あなたの手中の吐息は、宝石でいっぱい

＊　　＋

宇宙は雨に濡れて・・・
お話はここで尽きてしまうのです（いつも）
道はどれももう草むらとなって
でも雨は注いでいるのです
ああ、宇宙は永劫に雨に濡れて

朝日は沈んでいく

夜は終り、朝日は沈んでいく。
春の果実は処女の乳房のように
この眠れなかった少年たちの、横たわる

海色の暗い平原を凝視しています。
一定程度の愛を込めて
夜明けのスキャットは誕生し死んでいきます。
沈んでいく朝日！！
　都会の額は湿っているようで
　実は何も変化はない、
　それは何て哀しい
逃走したのは始発電車でしょうか
けなげな新聞少年、でしょうか
それとも最後の野良犬？

とは云ってもあの少年たちは
今から眠る訳ではない、
あの果実をいつの日か把握する
そんなことは幻想であると
誰もが知っているのです。

　実に何も存在しない世界がみえてきて
　朝日を愛さずにはいられないのです。
今、夜はすっかり終り
朝日は沈んでしまった。

（夢）

夜光虫の大群が押し寄せて
眠れぬ漁師の舟唄に
目覚める夜半の夜の深さ

（ああ昨日は永い夢だった

白い砂上を歩いていたら
遠い沖で呼んでいた
落日の中で呼んでいた
僕は知らないふりをして
自分の内面をみつめていた
内面の深い暗闇に
星の光を探していた）

ぎいぎいぎいと果てもなく
漁師は舟の櫂を漕ぐ
夜光虫の大群の直中を
眠れぬ漁師は漕いでゆく

（ああ夜明けは遠い
海はあまりにつめたい
夜明けはもはや来ない
今一度夢を見ずには
今一度夢を見ずには）

夜光虫の大群よ流れ去れ
やがて波間に消えて散れ
漁師の舟唄やむように
漁師の舟唄やむように・・・

ステージ＊

饒舌街道の後向きの主演者
その手にもつ空白を暴露け出せ
然し振り返ることはせずに
舞台（ステージ）には後向きの
演出者穴を探して這い擦り廻る
拾円硬貨は笑う
破綻した天よりの散乱する宇宙線
陰画はイメエジアップする
からまわる風車

「　　」
喪失とは存在のシノニムであると
噂の男♂は登場しただろうか
光源はいつも水源である
酔いどれバロックは変身せよ
コウモリ男は変身せよ
〈毛髪は変身せよ〉
何も聞こえないがたしかに
誰もが怒鳴っている
からまわる現在
天を指すことは終った
冬は終った
（そして再び来るともいう）
依然として輪廻は直線なのである
矢印は変換せよ
いつになっても矢印
行く←来る→
現在から現在へと彷徨する
偽りのモンタージュ
口に手を押し当てて
その手を束縛することをせよ
心臓を透明（クリア）にして叫ぶとき
男Aは飛び出す！
だがこれもまた後向きの背中
その手は自分の手を手に把み
朝食のフォークを待っている
何という直線的な食器！
盛られた瞑想は滞る
喉の奥に突っかえるメディテーション
吐き出そうと思えば飲み込める
その時もからまわる風車
「　　」
シンフォニーは朝に沈没する
まるで蒼い朝日の形相のように
幼児の瞳孔を通過して沈んだ
やはり舞台の断層へと

張り裂けるカーテンコール
なぜに後向きの背中
飽くまでもからまわる風車
からまわる現在
煙＝霧であっても夢幻ではない
特に女Ａの咽喉より立ち登る
あのオーガスムについては全く
その通り！
地面は掘っくり返されて
もう空と変わらない
空白を埋没するには空を閉ざせ！
だが幕はもう透明になっている
そのことに気付いたのは
一体どの観客だったのか？

乾いた義眼
茫洋の砂丘
色彩喪失の海平原
石像や墓石や涸れた貝殻
そして、風に消された足跡

あれから見たものはただ
遙か水平上を曇らせた
どす黒い蝗の大群
ああ、ただそれだけだ
あの把握できない遠方の
煙の移動
滅亡への飛行群
ただそれだけだったではないか！
既に時計も役立たぬ程
久しく潮は繰り返され
この手に取り出してみる義眼も乾き
石の如くに風化されていく
いつかは砂上に風に散り
失われるだろう、しかし
失われていくものはいったい

何だと云うのだ
実際何が失われると云うのか！！

茫洋の砂丘
色彩喪失の海平原
石像や墓石や涸れた貝殻
そして、風に消された足跡
風に消された
足跡

追悼詩・蒼い地帯

Ｙ氏が殺害されて遺棄されたままの
この神経質（ナーヴアス）なる蒼い地帯は
その把握しきれぬ曖昧なる実体故に
白亜のエンタシスを建てよと命ずるのか！
ああそれは欺瞞的美化の行為にすぎず
その無意味なる発想はメガロポリスへと葬り去らねばならぬ
或る時落下してきた顔のない操り人形（マリオネット）は
その繊細なる糸を断絶して速やかに焼却せよ！
「天上は軽薄なる神神の狂宴で混乱しているのだ！」
ああもはや何をも存在させず封鎖するのだ
そして錯乱の現在を極めて衝動的に隠滅し
いびつに変形した太陽球を呼び戻すのだ！
（その前に）
見よ、この蒼い地帯に月が登ってゆく！

注：Ｙ氏とは高校時代の親友山本富雄氏である。
実際に彼が殺害されたのではなく私のイメージでは彼は思想的に殺害されたと感じていた。

四月の幻想に纏わる四つの章

真昼の祭壇に関する未完の章

青空の上の垣根は何ですか
（ファンタジアは流浪する）
碧という次元は喪失に通じる
冷え切った天体への憧憬は処刑される
なぜにあれらの空白は蒸発したのですか
（黝んだ虹の映像？）
旋律は風によって排泄される
偉大な感覚器官は蝕むことが好き
昇天の群像は連続してつづく
その究極には何が存在しますか
（祭壇？）
言葉はひとりで遊んでいます
呪文は虚しく徘徊しています
いばらの垣根の周界を
失われたものは行くところがない
どこへ行けばよいのですか
（？）
あああ、のっぺらぼうの正体は何だ
発散した事象はどこへ行くのだ
条光の浮遊はどういう意味だ
神話を愛する聖女は云った
（すばらしい永続！）
まったく、終了しないことは美しい
しかしあまりに美しすぎて
涙が溢れてきてしかたない
祭壇は朧な果てに隠遁してしまう　未完

午后の洗礼

あの楡の木についてはもう語るまい

という光沢の破綻した午後だ
あらゆる霞に包囲された春だ
洗礼は行われている。
と言い残して去った女の吸い殻だ
つまらぬ詩人たちのうなだれた行列だ
萌えるのは草だけじゃない
終了しない処女の放尿に
バランスは失われている
この湿った土壌について想う
というささやかな肉情を
つる薔薇は刺殺している
と思ったのは単なる記憶にすぎない
豊満な怠惰の発芽はつづく
春の乳房より偉大なる心象よ！
これは、と云えば全くの真実なのだ
つまり、洗礼は行われている。
幾許かの刻みを通過すれば
もう一度会えるだろうか
あの女とあの女の失言とに
内包した胎児の陰核に
再び発芽はもたらされるだろうか
だが行ってしまった
浮遊する桜の臭気はなぜに
あれらの雲を生産したのか
とはさまよえる動機（モチーフ）であり
結論でもあるとは、
ああ、もう語るまい
実際すべては終了しないのだ
「洗礼は行われている。」

目には（口には）

目には黄疸のデンデン虫を生産している
口には充血した性器だ！
背後には醜悪な貧乏絵描き
とその情婦、空には

宇宙人の魂、光る
きらきらと燃えているんだよ
隠れちゃいけないよ、情愛の概念
君は脳細胞を露出して
いかにあのアカシアが性的に露出
しているかを教育せよ
ミドリ色の恋人が浮かんでいるよ
ふらふらと漂っているよ
不思議な春だなあ！
マーマレイドを口の周囲にべっとり
雲はべっとりと泳いでゆく
黄金の楽隊が麦畑で排泄している
並んで、並んで、並んで、
どうしたの？みんな胸が膨らんで
満タンだ。
僕はもう遠慮しまあす
ああ世界はお休み
みんなでお休み
教科書は真っ黄色になってポストから飛び出す
雲よりも散乱する
掴みきれないボリゥム
あの子も大人になったのかなあ
溢れ出た蜂蜜は舌を硬直させる
血走った太陽が真上で旋回する
目にはデンデン虫口には性器

曇った春の瞳孔

湿気が発展して天は桜の花散乱です
足の露出した淫乱な女神が寝ています
あ、滑ってしまった！
饒舌に沈没した現代の十二神
彼らの性欲は曇ってしまった望遠鏡
みえない、みえない、みえない・・・・と
鉛色のリボンが悶えている
あれらはスカートを翻したがる都市の女

空気の瞳孔をもつ生物たち
遠い女像
曇天
ゆく、ゆく、ゆく、・・・・・・・・
警官の服を着た娼婦の足
コンクリートの貞操帯をぶら下げて
はしる、はしる、はしる。
〈ハイウェイは転倒したまま〉
プラスティックのビルはハンドルをマワす
ハイウェイは終了したいと願う
曇った瞳孔はアスファルト上に開いている
消失するスピード・メータ
（空港）はどこだ！
あの天の子宮を把握できるのはどこだ！
ああ、ああ、ああ、
応えるもの
ない

初期詩群

高校２年（１６歳）から浪人時代（１８歳）の作品

一　水色への哀愁

黒い樹間の朱い珠

葉っぱを失くした
大きな二つの黒い樹の間に
何やらふわふわと浮かんでいる
あの朱い珠は何でせう

あの朱い珠は何でせう

さうですあれは

きのうミケが戯れていた
あの赤い毛糸玉なんです
ああ金色の空の中に
あんなにも愉しさうに
ふはふはと浮かんでいる
あれは赤い毛糸玉なんです

沈む夕陽ではないのです

さうですそして
しべりやおろしの鳴く頃に
きっと真っ赤なセーターになって
私を暖めてくれるでせう

きっと暖めてくれることでせう。

死人の顔

生臭い漁村の岩陰で
夕陽が蒼ざめている
波の音もとぎれとぎれに
耳の奥でのたうちまわる
滑らかな感触が
首のあたりを伝わる
灰色の瞳孔はもはや
開ききったまま笑いもしない
それでも微かに濡れている
その冷たい唇に触れたとき
夥しい数のふなむしが
にわかに騒ぎ出した

春宵桜

蒼白い朧
女の長い髪
くたびれた麦穂

死に絶えた池の水

それらを風が震わす
この暗い春の宵に
夕陽など存在しない
ただ桜並木が続いている
私の眼前より無限の暗闇へ・・・
ああその淡く浮かぶ白い花弁は
混乱した紙屑のようだ
白い紙屑のようだ

蒼白い朧
女の長い髪
くたびれた麦穂
死に絶えた池の水

それらが消えていく
この暗い春の宵に
私はその残像を否定しつつ
この憂鬱な桜並木に
ひとつひとつ火をつけてゆこう
錯乱した春の花に火を着けてゆこう

東京砂漠の伝説

いつからか
東京砂漠の真ん中には
不可解な石像群が
何も云わずに立っている、
それらの虚ろな眼は渇き
遠方をみつめているのでもない。
まして自らを見極めてなどいない。
そして時折吹き荒れる砂嵐にも
それらは鳴きもせず
無関心を装い
ただ無口に立っている

ただ立っている。
ああ、案山子よりも孤独な者よ
汝らこそは文明の遺児なのだ！
哀しい石像群よ。
だのに貧しい隊商達は
なぜに手を合わせてゆくのだ。
オリエントより亡国への使者よ。
いつからか東京砂漠は砂塵のために
空を失ってしまった。
渡り鳥も寄りつかなくなった。
けれどもそれら石像達は
自身の亀裂を
崩壊から維持することで
精一杯なのだろうか。

水色への哀愁

メガロポリスの呪われた吐息のもとに
おまえは逃走させられた
かなしくも。
わたしは取り残された
ああ北欧のフィヨルドが恋しくとも
少女よ。
その瞳にはもはや
憂鬱なブルーしか映らない
夜明けに去る。
わたしは取り残された
朝のオアシスは蜃気楼にすぎず
マシゥの水さえ濁り
メガロポリスの爪は伸び
おまえの頸動脈を切り
溢れ出た血の黝さに
かなしくも。
わたしの嘆き奏でるのは
水色への哀愁である。

夜はうたわない

幾億年昔と同じ石に腰かけて
悲しそうに顔をしかめているのは
うたわない夜の影である。
そしてその背後に背負っているのは
安らぎでも希望でも何でもない。
ただ空虚な闇だけなのだ。
夢だの星だのとは
人間のこしらえた他愛ない虚構にすぎない。
まして水色の太陽球の浮上は
単なる必然ではないか！
だから夜はうたわない
ただ悲しそうに顔をしかめている。
そしていつかその姿を見たいと願い
真昼のように明るい電灯で照らしたら
もうそこには、夜はいない。

太陽への航路

顔をそむけてはならない
あの錆びた球体は、ああ
太陽であることは真実だ！
観念の彼方で否定している
あらゆる真実はもはや
おまえを欺いたではないかと！
だがやはり顔をそむけてはならぬのか
日没が幾度繰り返されようと、ああ
舵は固定されてあの錆びた
太陽への航路
しかないのだ！

二　絶望の奏でるエレジーたち

灯籠流し

墨汁のようにどす黒いこの川を
無数の灯籠が流れてゆく。
厳かに緩やかに漂い流れてゆく。
夏の夜の暗さを嘲笑い乍ら
灯籠は静かに流れてゆく。
ひとすじの道となって
ああ、いったいどこへ？
誰も知りはしない、ただ
遠い、光の集まるところへ・・・・・
私をひとり取り残したまま
・・・・・・・行ってしまった。

夜の郊外電車

夜の郊外電車は寂しい空間。
光の流れる都会から帰るのだ。
深い深い闇に包まれた我が家路を。

夜の車内は黙殺された場面。
話すことを禁じられたただただ長い時間。

ああ、暗い蛍光灯の下の蒼座めた蝋人形の列よ。
おまえたちも同じ仲間なのに。
色彩かな光の幻覚にもてあそばれ
すべてを喪失し疲れ果てた同じ魂なのに
なぜにそんなにもさえぎられた
ぶ厚いガラスの向こうで瞑想しているのだ。
白っぽい光に包まれた異次元の
手の届きそうで遠い遠い世界に
ああ虚ろなるまなざしの仲間たち。
これは悲しいことだがもう誰もが

そう思わなくなってしまった。
その事実こそはもっとも私を悲しめ
放心させる程に失望させたのだ！
けれども今この電車は我我を共に乗せて
懐かしい家路を走ってゆくのだ。
深い深い闇の中をその轟音は
遠い昔に帰ってゆくようにも
そんなふうにも聞こえ来る
事実、遠い遠い昔へ、永久に到達できぬ駅へと
夜の郊外電車は走ってゆくではないか！
我が共に哀れなる仲間たちよ。
夜の郊外電車は寂しい空間
光の流れる都会を忘れて帰るのだ
深い深い虚脱の中を、我が家路を。

曇った鏡を拭いてみるには

不気味な長い夜、冬の夜、
霧も降らない、木枯らしも吹かない
春を待つ生物も衰弱しきった夜、
曇った鏡を拭いてみることはなぜに禁じられた行為なのだ！
いったいこの夜の長さを知るには何の術もないじゃないか！
ああ、おまえはいつからそんなにも
殺漠の枯野を映す乾いた眼で
冷たい亡霊を追い続けるのか
失われた青春の亡霊が逃げてゆく
全ての繁栄、全ての満足は、
誰が創った虚飾だったのか
後を見れば長い夜
霙も降らない、木枯らしも吹かない
鏡に映る血の気の冷めた男の舌は
実は曇った鏡を嘗めたくても
乾いてなんかいやしないのだ
けれども眼だけは乾ききって、追い続ける
連なる闇という名の亡霊の背後を

でももう、追ってはならない追ってはならない
追ってはならない！
外は霙も降らない、木枯らしも吹かない
春を待つ生物も衰弱しきった
無意味な長い夜、冬の夜
おまえは永久に帰らないだろう
鏡の背面世界へ陥ったように・・・・

昨日に寄せて
この暗闇に手をさしのべて
ああ、うたっておくれよ！
少女たちはその合唱をとぎれさせずに
この世の何よりも透明な唄を！
その冷たい笑い声のように
でも、一体何があったのだ？
みんなどうしたのだ！
この暗闇に微かなる余韻さえも残さずに
冷たいおまえたちはどこへ去ったのだ
置き忘れた時計の刻みが咽び泣く
もう昨日という日はノートの空白に存在するだけだ
みんな行ってしまった、遠いところへ
あをじろい月に光に映える
ノートの空白がやけに目に沁みる

秋の瞑想

秋の心象がくろずんだ葡萄腫に浮く頃
私の目の間に並べられた悲しい顔たちの
その神のような静けさに彼ら自身驚くのだ。
これは煉瓦色の秋の創作、そして、
やりきれぬ秋の溜息・・・・・
今、私は冷たい碧空が見たくて、
閉ざされた小窓をこじあけてはみたが、
ああ、もはや秋の絵画は盗まれてしまった。
冷明なる太陽球はあまりにも欺瞞に満ちているではないか！
私は満足することを失ってしまった。それゆえ、

もう無気力な瞑想家にしかなれないのだ。
だが甦り来る追想だけが私を楽しめるのは
尚更秋の存在を虚しくするだけなのだ。
ああ。すべては忘却すべきだ！秋の概念とともに！
だから私は一枚の枯れ葉を拾ってきて、
うまくない煙草にして吸ってしまった、あの味気なさよ！
これからは残された煙の息苦しさの中で
ああ、秋の肯定的な落日を愛する傍ら、
私はこれらの悲しい顔を刻むのだ、秘かに。
そのとき心臓を流れるこの冷たい血液の
漸時的な感触の鋭さに耽溺しながら
いちしか必然的に私は秋を失うだろう。

ある覚醒

おまえがわたしを呼んだとき、私は、
夕暮れの湖水の畔で、
遠い昔の宗教家たちと
何だか訳のない話をしていたのだ。
それは神々の噂のようでもあったし、
無意味な妄想のようでもあったが、
私は何も覚えていない。
おまえが私を呼んだから
すべて忘れ去ってしまった、夢みたいに。
おまえの立っていた背後には。
背の高い樹木が風に踊っていた。

排泄と喪失

晩秋の落日には金色の瞳孔があり
必死に何かを排泄しようとしていた
それは人間たちの涙のようなものだろうか
落日の内面はびっしょりとぬれているようにも見えた
だが時間の流れに寛容はなく
胸いっぱいの悔やみを残したまま
すべてが喪失へと移行してゆくのだ

だから落日は、もはや諦めきって
結局何もせずにただ見つめていた
枯れ枝の真っ赤な柿の実ひとつを
それゆえそのまま落日は喪失されるのだ
（その悔やみはやがて、水色の朝に忘却されようか？）

真夜中のエアポート（逃亡）

真夜のエアポートに
秘やかに身を横たえているのは、
8の静寂を追求しているあの、
銀色の機体だけなのだ。
そして今それに搭乗しようとしている私。
――――――いったい私はどこへ行こうとして
あの錯乱から脱出してきたのだ。
なぜに背後の光の羅列を振り返ることを
自ら禁じたのだ？　　（ああ）
ここは真夜のエアポート
星座は美しく耀いてくれても
この暗い送迎DECKには誰もいない。
そして朝までは不休の夜・・・・・
数知れぬ照明灯の群よ！
それらがどんなに明るく耀いてくれても
この暗い真夜を白昼にすることはできない。
（その逆はできても）
そして真夜のエアポートを支配する
恐ろしく巨大な黒い空間に
ただ身を横たえているのは
8の静寂を追求している
あの銀色の機体だけなのだ。
そして今それに搭乗しようとしている私。
――――――憧憬と厭飽との交錯。
ああ、もう離陸の時刻だ！
私は至急この東回りに搭って
未だ見ぬ菫色の夜明けへと、急ごう！

三　リリカルな神話「聖女たち」

秋の蝶

秋の蝶は
白くなければなりません。
水色の空を
彷彿として漂う
白い幻覚でなくては。
ああ私にはそれ以外考えられません。
それゆえ秋の蝶は虚構です。
透明な心より生まれ出た
純白な飛沫だもありませう。
氷の一片でもありませう。
ああそれは、冷たい空が憂いにみちた
小春のある日に舞うのです。
心の奥では泣いている
　　冷たい碧空の中を
高く
　　低く
　　舞うのです
何という美しさか誰もが知るのです。
秋の蝶
秋に生じたこの美しい空白を
決して虚しい追憶で埋めてはなりません。
秋の蝶。
秋に生じた美しいこの空白を
決して空しい追憶で埋めてはなりません。
秋の蝶。
ああそれは秋に生じた一点の
純粋な　　空白なのです。

忘れられた病室の少女へ

（こんなにも空の美しい秋）に
僕がどんなにか僕の蒼ざめた心臓を
君の抉られた眼窩に入れたがっているか
裸銀杏の並木道を通るたび
僕は秘かに然し強く認識するのだ。

ああ君の周辺の蘭はあまりにも
僕の破産した概念空間では
虚弱すぎるイメェジにすぎない
しかし君自身はもはやその日常性の
枯死してゆく実態を常にはっきりと
予言することができるのだ！！

ああ僕は人知れず呪う
この秋のしらじらしい明るさを
優柔不断な太陽円を
そして色あせたブドウ酒の妄想を。

しかし僕の殺人未遂は既に
抹消された幻想の断片として
あの冷たい碧空に吸収されてしまい
僕は極めて第三者的に
この事実について述懐できるのだ。

一体それでいいのか？
忘れられた病室の白い壁の内面で
永遠に僕に呼びかける人よ！！
秋深まると僕の罪悪感と共に
女の顔を刻む作業において
かつて君の顔を刻むために流出した
僕のかなしい血液の行方を
君は知っているのか？

冬の原点

冬の石灰質の夕陽は
遠い原野に浮かび
この枯れ果てた
三次元の庭のどこかで
きわめて植物的な
女のような生物は成長し
ただ秘やかに呼吸し
疲れ果てた旅人の
パラドクス的な衝動は
冷たい大気となり満ち
この庭を戻り遙かなる
非合理の暁へと
水晶色の雪のヌプリと
凍結した湖水の底へと
沈めてしまった現在
冬の刈り取られた野原で
北へ行くエホバの群を見た。
ああ旅人は疲れ
無為なる憧憬は捨て
この冬の原点へ
透明なる一点へと
帰って来るのだ今こそ
追憶を遮断し
未来を黙殺して
すべての旅人は今この
冬の原点に帰するのだ！！

冬の空（・）海へ

（一）
冬の空を拝むとき
記憶を喪失せよ樹木
その神経系のみの肢体を

冬空の究極にまで伸長せよ
果てることのないガラス空間を
その感覚系により支配せよ。
（二）
冬の海が見たい
という欲望は形象化した
わが脳室内でオブジェ化して
発展しないことは哀しい、事実
冬の海は存在した
それは遠い夏の（あの海は帰った女）
の血の気のさめた胎内に
瑠璃色の平面が
あらゆる理性を内包して
存在していた
「淋しい受胎の季節」

白い朝の聖女像

この世の繁栄の
実は何もない
ところに
淋しいリラの花弁が
風にも揺れずに
ただ存在するとき
冗漫な朝の朝食に際して
口ずさむ食器の
盛られた記憶を

渇いた食道へと
流し込んでいる
白い朝のこと
君はいったい
どうして僕を殺せずに
その齦のフォークで
僕を刺殺せずに
行ってしまうというのか

ああ
この白い朝のこと
君のイメージは凍っている
呪わしい大気の固定に
苛立たしく狂う
僕は君を犯そうと
あらゆるフォークを投げつけた。

四　イマジネーション・都市１９７０

幻想都市

赤い喫茶店で
女の吸った煙草は美しい
お、お、美しい煙立ち上る
風が風刺した都市
おまえは心臓をひけらかせ
メガロポリス７０は静止せよ
ステージは招く
何でもない立方体
（メガロポリス７０は発動せよ）
茶色いステーション
は飽和した卵を抱え苦しむ
固形の発情体は離陸せよ
失われた文明論は翻る
まぶしく雲はゆく
!. 0.まであと零キロ！
ガードレールは錯誤する
没！没？没！
（合成樹脂のオブジェについて）
成長する非生命体
方向は合成される
奇妙な方程式を翻弄するのは
赤い喫茶店にいた
あの女の

胎児
だ

α通りの悲惨な青春

ビニール袋の中で飛んでいるのは何ですか
と尋ねる顔のない老婆の引きずる曲線は
α通りを遙かに消えてゆく・・・・・・・・
雨は降っても埃か霧の宇宙線
碧空の幻影を追跡する音楽は
絶やしてはなりません・・・・
淋しい時には踊りにゆこう
α通りの道標がさみしく誘う
あの電柱の背後で少年少女は何を
しているのですか？すべては電柱の陰
いつも何の原罪も見えません
しかも六月は近い！
暗い日曜日は毎日やってくるし
実際何もかもが毎日やってくるし
でもそいつは大した事件じゃない
それはこう叫べば片づくことです
「滅亡してゆく全人類よさようなら！」
なぜに滅亡？どこへ行くのか？
でも答は決まっているさ
このビニール袋の中でとんでるじゃないか！

もうひとつの夏に寄せる追想

この白い記憶の都市において
海について問うことは終った
イマジネィションは夏になっても
アポロンを追跡することは終った
タンポポは薊には変身しなかった
アスファルトは流動しなかった
産卵したのは誰でもなかった
ただ恥骨の樹木と陰毛の雑草

貧しい節足動物たちの
ジャズは息苦しく排泄している
空は水面を映しています
しかし渇ききったクリエイションにすぎない
なぜにこんなにも乾いた土壌
なぜに〈夏〉
ああ空は水面を映してはいます
けれども渇ききった水面に映る
都市は形骸にしかすぎない
夏は形式にしかすぎない
しかも無意味な形式
そして全ては終った
この白い記憶の都市において
すれ違うイマジネィション
すれ違うクリエイション
失われた夏状突起は
冷たい都市における
冷たい＜夏＞でしかない
ああ何という都市の夏！

太陽は健康的に病気をしています

それは全く病的なカフェテラス
で口にしたミルクとコーンスープと
朝霧のバラ色の精液に
少女は哀しみを胃袋に流動させながら
走っていったであろう美しい日日よ
太陽はカタツムリの模様を印けて霧に浮かぶ
ああ都市は何にも孕んじゃいないのさ
でも孕まれている
（誰に？）

少年は詩人の素振りで新聞を抱えて走る
朝です
霧です
なんて第三次元の美しい情景

偉大なる病気の情景
太陽、浮かぶ、プラスティックの、
昆虫は産卵する、
銀杏のアベニゥ
枯れてゆく、ああ！

私はいつまでも傍観者ではない
実に、
太陽は健康的に病気をしている
実に、健康的に
私は飛び出すだろう
病的なカフェテラスから
アベニゥを、
灰色の舗道を走る

クチビルのブティークは紅く走る
目玉のサテンは黒く去る
白白白！！白いメゾン往く
アベニゥを突っ走ること
即ち美しき日日へと回帰すること
ああ、
そんなことあるもんか
あるもんか
るもんか
もんか
んか
か
・・・・・

〈孕んでいるのは誰？〉
わたしはどのＳＴＮにおいても
ミラーを覗くことを禁じられた
私の眼光は悪魔のように充血し
私は殆ど貧血症状であり
あのグリーンハウスの上に
いつの朝か死んでいるのではないかという

戦慄が駆け巡る

駅前交番で幻覚を齧ること
私は弁解するだろう
極めて非哲学的に
都市を孕ませる者を捜索することに比喩して
（なぜなら）
太陽は健康的に病気をしています
あなたの脳細胞上を這い回るカタツムリは
相対的に病気はしている
しかし健康そのものだ、という意味で。
霧は次第に色を変え
都市は結局諦めて横たわるだろう
あなたの目覚める頃
あなたの寝息の上に
インサートするとき
夢という夢は引きずり
堕ろされるだろう
（どうしても）

ナイーヴな欲情

六月の晴天には黄金の欲情
伸長する緑陰並は欲情する
ベージュはラメールの舌でから廻る欲情
ベーゼはプラザαを硬貨の穴に映して欲情する
ドグマ５――――――ナイーヴな欲情
テニスコートの空中曲線
白い垣根の倒錯直線
都市エリアのレール平行線
ズームアップはムサシノ快速線
崩れ去る太陽の塔、内面の螺旋光る、硝子のエデン
晴天は晴天六月は六月路面は欲情しています
溢れ出ない水面、揺るがない水滴
サンビームは無数直線に開花する欲情
（わたしはきみと光の街路を彷徨いましょう）

しかしきみはきみじゃない単なる欲情
港の見えない丘に登って出発しましょう
ラセン都市へ！
何もかもが昇天する透明のラバースコンチェルト
鳴くのです、泣くのです、啼くのです！！！！
ナイーヴな欲情、奔走する断章
告！！わたしは逃げ隠れできないイマジネィション
あらゆるブルースカイの下の自画像たち
彼等の空っぽの内面では球体が増殖していきます
あ、あれ、あれは、変形な球体という欲情
ルート・フリジドの白い陰核という名の欲情
パルチザンの埋葬した哀しいポロネィズでも聴きながら
編み物でもお料理でもSEXでも致しましょう
（あなたは光の街路を彷徨いましょう）
勿論、耀く肉を暴露け出し
ロジネスピンクの自由の賛歌を振り乱して
ああその豊穣の印章を波打たせ
激高する肉胎を息づかせ
忌まわしい陰部は削ぎ落としましょう
何もかもがナイーヴな欲情！！
あの、あの、あの、あの、
銀色に欲情する空中都市を犯すのです
退屈な教育者の腐った口蓋へと
叩ッ込メ！！
それには、バリアは融解せねばならぬ
バリアはバリアでしかないという日常を！！
バリア、バビビブベボボ、没々々々々々！！

（エピローグ）

舟は航海しただろうか。その舳先をあの錆びた太陽に向けて。
そしてそれは終ったのだろうか。蒼い地帯を振り返るとき記憶は甦るだろう。
この砂丘に佇むとき、波に彫られた砂の刻みは、水の哀しみをうたいその旋律を聴きながら僕は再び出発するかも知れないんだ。今度はあの錆びた太陽に背を向けて。なぜなら僕はもう舵を操作できるんだ。そして唱うだろう。蒼い地帯はいつまでも蒼くはないんだ。滅びゆく夕陽を追って漕ぎ出でるようなこと

はもうしないんだと。きっぱりと背を向けて東の方へ出発するだろう。新しい僕の舟は、新しい海を、新しい太陽を求めて！

第２詩集

失速する魚群

大学時代の前半２０歳ー２２歳時の詩集。
当時詩人の後藤正紀氏が主宰していた、エリア３９やアポリアといった同人誌に掲載されたものである。当時の敗北した学生運動の焼け跡の虚無が鏤められている。社会から個人への回帰。

秋の入口

（標識は――夏の灼け爛れた記憶には冷たく別れを告げませう）
そして私は一体誰に手を牽かれ
あの橋を渡って逝けばよいのですか？
（おや風鈴ですね！）
あれは屹度
離別してきた夏
へ置き忘れた砂時計
砂の上へ影を置き忘れた
寂しい女の腰の縊れ
流砂々螺沙羅
けれども何をも
風が漂白くしてゆく
何もが色彩を喪なってゆく
風は
季節の裂け目へ自らを失い乍ら
吹いてゆく

橋の向こうには空白の顔たちが
淋しそうに手を振っているのですよ
紛れもなく（私）に対して

空白な顔たちは手振る
彼方！
に光る物体「物質物界物象」
は飛行機ではない
あれは静止した雲
其の奥には
光る大気
秋の
心
　　臓
　　（想起しませう秋の朝は
　　眼が潰れる光の烏は群舞する
　　でももっと寂しいことには
　　私の屍を埋める為の
　　ひとつの情景を孕んでいるのです
　　直線的な朝の棺桶の上に！）

死は何て
秋の手の届く所では
美しく刃物のように光る
魚のような刃物
雲のような魚
孕む呪われた瞑妄の生物群
（内乱？叛乱？とにかく予感！）

ああなぜに！
私はいつ迄もこの橋を渡っているのですか？
　　の
　　橋
　　を
　　渡
　　っ
　　て
　　いるのですか？
恰も終了しない行為の如く
私は手を牽かれ渡っている

（白い夏の灼け爛れた記憶には
冷たく別れを告げましょう）

告げましょう
告げましょう

告げましょう
告げましょう

でも橋の向こうには
空白の顔たちが淋しく笑って
いるのですよ（風鈴は？）
あれは崩れた砂時計
私の手をいつ迄も牽いているのは
誰？

ああ私は！
橋から見下ろしてはいけない！
そして空白の顔した私の魂が！
ゆらゆらと揺れているのを！
見てはいけない！
いけない！

（標識は――――――――――――――□）

秋の解読

序（プロローグ）

私の傲慢な胎児が宿る
彩られた曇天の棲家に
熱病を装う瞑妄の男と
自らを夜毎虚飾する女

西暦７０年曇天の秋は
捏ね廻すだろう
私の色褪めた告白を
何如に私の脳壁の刻印は
亡霊となり彷徨う
古代隊商の遺文
のように沈黙
しているかを――

◎アキ・の・解読

秋空に光る
あの文字盤のない時計
における解読
に纏わり想起された
少年期における私の
割れて了った瞳（鏡の如く！）
その破片を拾い集めることは
碧空
という性的に冷たく流れる液体が
太陽の嫉妬と欲情とを飲み干した
還らぬ季節への哀しい悔恨を
息苦しく吐き出している
草原に横たわる人々の風のような影
そして秋の空白への投射された
淋しい告白
とを喰み尽くしてゆく事象
から始まった――

――――――追想として。

碧空の上界にある
白い垣根に居て走り去っていった
あの夏の日の淋しく笑う女
の黝い乳房

にパラノイアの傷から流れた
血痕
を秘っそりと垣間視る彩かな欲情は
私から衝動を奪った
私の瞳は澄み切って
宇宙は硝子になった
真紅のノイバラと血痕とが巡って逝く
いまだに私の蒼ざめた秋の心臓を
棘を立てて巡っている
苦渋よ！
（あの夏垣間見た永遠よ！）

そして何故に割れて了った瞳（鏡の如く！）
或いは合掌した手の中の
滅びゆく宝石
だが滅びても宝石だ宝石であるよりも眩く宇宙に散乱してゆく
もう再び拾い集めることはできない

◎罪状そして解読のヒント

茫洋として徘徊する刻
脳天を開いたように周りは発散だ
その虚妄の彼方に
白い煙を旗の如くに掲げている
透明な紋章の家々に
きのうまで棲んでいた家族
羽のような会話をするあれらの近親者を
惨殺すること
の罪状――――――を持って来た男は
（消えない責苦！）

そして幾度となく再び
秋について問えばそれは
感覚器官を喪った寂しい顔たちが
母のような優しい手で内蔵されてゆく
〈解読の内蔵〉

方程式は飛翔しようとしても
疲れ果てた追跡者の背後に
纏わり付くのは明るい葬列
光の棺の内には
空白が横たわっている
ああ私の萎えた衝動と
散乱した欲情との
哀しい変身よ
それがいつどこで為されたのかを
だがもはや語ってくれる者も
いない
この手で惨殺し
散乱させてしまったもの
鍵（キイ）
ヒント
トケイ・ノイバラは螺旋化
葬列の心象には紅い呪文或いは
翻る宇宙（コスモ）すなわち碧く拡散し
この数学者を糾弾するとき
紫光のコップの中のレビュ
コップの中の隔離された碧空
それが恐らくは
鍵（キイ）！
正（まさ）しく
ヒント！

（反歌・光ル大気ノアル風景）
赤イ髪ノ女ガ待ッテイタ。
アノ都会ノ内部ニ独リ。
秋ヲ解読シタ光ノ女――――――――
アノ女ハ佇ンデ笑ッタ。
シカシ秋ハ其レヲ、
光ト思ッテ、
眩シゲニ瞳ヲ逸シテ、
走リ抜ケテ了ッタ。

振リ返リモセズ。

記・一九七〇秋

小詩群・偏光感受

世界（宣誓）

私は私の頭脳に対して唐突にダイナマイトを投げ込んだり
私の肛門へ砕けた硝子片を執拗にネジり込んだり
私は致しません、いつも
感性の透った壁に凭れ掛かって憂色深く
無感情の詩（ポエム）ノートへ散りばめるための語片を
占星術の教典から拾い集めたり
私は致します、そして
疲れたら水晶のように冷たい寝台（ベッド）に横になって
星座表を廻転さすような仕事に取り掛かります
世界はそうして私の脳室の天井に存在しています

弦薔薇に寄せる妄想

夢醒めの朝はいつも歯車の軋みで
東方の朝焼けを弦巻バネの胎動で
ネジレの艶歌流聴する空洞風凪ぎ
豊饒の内的空腹引き摺る舌縺れて
絡み付く暁の情念秘めやかに勃せよ！
弦薔薇に関するセツルメントは徘徊より
回帰の絹擦れ破綻する奔走の閃光へと
仄かに芳香する鱗粉発現する幻象の刻
飛翔！汝飛翔せよ上界の陥落したパラノイア
欠落没落の敗的意情充満する胸郭露呈せよ！

如何なる垣間視を以て終焉とし幕引くか
饒舌な逃亡者汝の背徳より昇華し

天を覗き観るヌプリと美化されるか
輪廻の地を這う発芽の賛歌（オマージュ）に塔乗して
追い縋る虚妄の所作造形する機織人
汝の生命弦薔薇の如咎有るを以て認識せよ！

H氏の奇怪な夢

オレの墓標を齧ったのは誰だ！彷徨横丁の
歯だらけのマスコミュニケイション純正部品白日に
男根大大的に蒼い観察者の歯軋りから零れる
ヌードアルバム断頭台への灼夏の行進垣間見る
大地戦慄にカーテンコール頭脳痙攣ざんばら翻し
尖鋭なる発毛ベニバラ的放言放出射精揮々々々々！

あわれ陰の入江の砂漠の腹上のノタ打つ酩酊の
血痕倒錯ならぬ衝動は汝の意識深層へ飛翔せんと
其の脱毛かまびすしき凌駕感身持ちならぬさらば
尚も否定せよ我が頭蓋を齧る情念彷佛として
北回帰線へ波動する赤道七周半毎秒！

破綻走行

閃く脳天その破瓜の懐想より
垣間視の思想もつれてより
諸手翳す歩行者天国より
失踪のモチーフ蝕まれてより
躁鬱Nippon列島転覆されてより
倒錯に取付かれた饒舌者の背後より
轢き殺せ
挽き廻せのアジビラ舞いつつ
節穴のプラネタリウムは閉窓するのみだ
震撼として塞ぐ上空よりの侵入者
或いは不条理の螺旋群及び営林
恰も確信して蒼褪めの小宇宙
レール条理の気配を廃して
遠方は子宮の入り口扉だ

戦き？慄き？
埃を払う季節の幽邃だ
トタン屋根の物理的考察の目眩く
渇望の春への虫干しの時代だ
白金のギアの空転や軋みが
無機質な言語よりの生物の発毛を
脱次元的神秘性によって吹奏する
この摘まれた性器の埋葬に於ける
出発や帰順のない安息日（サバス）だ
美しい宇宙観の日和だ！

（透明な羽根に満ちた小宇宙）

しかも全く――――
天窓の下の蒼褪めの小宇宙に
蠢く蟻痒感レプラの羽根を輝かせ
光の埃を払う季節の訪れを実感するとき
私は私の分身！
透明の羽根を震わせる
ああ私は分身私の分身！
おまえは日昇る以前の胎動の紫光を
絶望の闇間よりの出帆の為に収束させ
おまえの脳天に翻る上界への発動に
憧憬の諸手を蛇首の如く伸長させ
雲散させよ末世の解脱の行方に
ああ透明な羽根に満ちた界隈を
掌握する情念の交わりの前夜（イブ）に
焦燥する短絡の殺害者（マーダラア）を目撃せよ
尚もきらびやかな透明の羽根の陰に！

Ｈ氏の初日の出

（暗黒な海を凝視していることの意義――
ケープイヌボウの遠視眼的な慈愛は
７１年を胎動させ得るか？

という類いのアレゴリーは自爆するか？）

人間達は鉄面皮ひっそろえて
永遠の方向を見つめているつもりです
あの辺か、あの辺か、あの辺か
ほらだんだんとしらけてきた
条光がほら
初日／７１！

そうして彼らは
永遠にみつめていた
いつになっても太陽は出なかった・・・・・

蛾城

また夜明けの訪れ、既に幾日、眠りの無い日々が訪れ去っただろうか、と記憶を手繰る、あの青い静脈の、透けて見える太陽がまた、風船のように昇ってくるかと思うと、ぞっとするから、私は耳穴を塞いで、頭蓋に反響する、遠い日の唄の残骸を捜していたり、それに腐心すると瞼を閉じて、暗黒の空間を独り散策する、と恐らくは遥か意識の彼方に、微かな光の地点が発見される、或いは蜃気楼か、と双眼鏡を目に当てれば、そいつは城郭なのだ、近づこうとして歩いたら、何ヶ月もの時間が経ったが、城門に立ったとき、私はもう城郭の中に居た、ロジネスな空が在って、シラスを耕した畑には、デリケイトな植物を栽培する男が居て、尋ねるとそれを、猜疑心と名付けたり、更に聴いていると、第六日曜日に礼拝堂へ押し掛けてくる二日酔いの女が居て、この生命たちに南方の毒液を注いでゆくのだと嘆いたが、その美しい仕事の価値を知らない者を、私はひどく哀れに感じた、冷たい春の午後だった、塔のてっぺんで、盗聴器が光った、なぜにパラノイアは発狂したか、という稚拙な条理に対して、私は今日的には、非常に冷淡である、それが応答でもあるが、とにかく全く水が不足していて、言語までが風化されてゆく。

落日落日（落日）

赤の円体は西方メガロポリスの憂愁の上縁垣くぐって
秋冬といつも石灰質化を強化していった
血になったり火になったり
陥落してゆくバベルの目撃者！
俺等現代のバルバロイの体内を流動せよ
あわれ落日落日落日！
豊饒の紋章は剥がされ円空になった
枯渇した道路の生育は忌わしい亀裂と具象され
俺等木のスプーンくわえて
蒼いホッテントットのなろう
さても消失してゆく残影は埃まみれ或いは煙って
メガロポリス墓石の無秩序（アンバランス）な羅列だよ
　カラスが批判している
　色褪めの森の上界
　都会の虚無の上空

夏眠

昨日去っていったあいつは今日はもう
　あの透けた真昼の月のなかで手振って笑う
（俺の心臓はペニシリンで透明）

マドギワの悲しみは６月の静物
庭先の木蓮は過ぎた思春季

おお甘美な崩壊の日日を回想する
不条理の鎮魂曲（レクイエム）を内臓した
辛夷の爆発は遠い音響

やがて水葬のナツ（夏）がきて
　全ゆるアフロディテの股間を滴る
全ゆるヴェニスを水没し
我らさいごの６月の黝い森を捨てるとき
　しかし既に円形劇場（コロセアム）は烏の棲家

（東方へと逃水を追撃する行列は

脳ミソを露出して太陽に捧ぐ
太陽神（アラア）はいつからか
胎教に熱中していて

水牛は蜃気楼を引き擦って
いってしまった
　無関心な鉱夫達の関数的な夏）

日時計は水没せよ！
無数のカミソリの葉に満ちた
枳殻（からたち）の殺意は蒸散せよ！
昼と云うのに月明かりのまどろむ歩兵の帰還
蝶道の閉鎖はあらゆる銃口の両足切断
　都市を呪え！
　残飯は放水路へと流せ！
全ての水路は虚構
経路はネジレのテトラポット
真昼の冥王星はネガティブに印画されて
流れてゆくよ白い水面を！

日時計は水没せよ！
無数のカミソリの葉に満ちた
枳殻（からたち）の殺意は蒸散せよ！
昼と云うのに月明かりのまどろむ歩兵の帰還
蝶道の閉鎖はあらゆる銃口の両足切断
　！え呪を市都
　！せ流とへ路水放は飯残
全ての水路は虚構
経路はネジレのテトラポット
真昼の冥王星はネガティブに印画されて
流れてゆくよ白い水面を
（同人誌あぽりあより転載）

まつりへ

（一）

祭へ行こうと電車に飛びのったが
祭は既に終わってしまっていた！

そんな生活がここ幾日も続いたので
すっかり憔悴してしまっている。
なぜか祭は
私が車内で憧憬しているころ
視えない目的地で
爛熟して割れた！
狂ったザクロの生長のように
不浄の血液を
然し彩り美しくカムフラージュして
（その方法が問題だが）
混乱の中で旨く排泄してしまったらしい。

「不知の空間での秘められた演出によって
堕胎は完璧に（パーフェクト）に遂行された」
（哀しい胎児たちは
　どの水路より流されたのだろうか？）

けれど全ては想定にすぎない。
ああまたしても今日
祭へ行こうと電車に飛びのったが
祭は既に終わってしまっていたのだ。
どうしても
祭は私を疎外するのであり
どのように焦躁したとしても
私は決して祭に間に合うことがない。
ああ、私は祭に交わることを欲望する！

（二）

私の思考体系は
空白の時差を孕み
あるいはその間隙に於いて苦悶したりしており
其の苦悶の刻みに於いては
祭は幻象ではなく
（確証をもって！）
祭は実在したのであり
即ち
何となればその虚脱こそは
祭の肥満した豊饒の肉体から
あらゆる繁殖の動因即ち
老化した臓器の数々
を抉り掻き出した
と云う
全く脱臭された空洞の小宇宙だ！
ああ何と云う哀しい肋間よりの垣間見。
　何と云う虚脱。
そして思考も虚脱。
と同時に
漂白されゆく情念。
ああ祭よ！
　祭は
いつ終わってしまったと云うのか！

然るに
疎外もこれ程徹底してくると
価値座標系も変換してゆくのである。
無イシキな内に回転しつつある。
ある種の自己合理化が
内分泌機能の如くに旨く機能して
完全に統制されているとも云える。
そのように
回転はいつもsmoothであり、
比類なく滞ることなく機能する。
だがもう
破壊の季節が疾駆している。

もうじきここへ来る！
『自己内へ爆弾を投げ込む準備をせよ！！
ホルモンはアンバランスに発射せよ！！
そして
奇形の植物で観念空間を占拠せよ！！』

おまえは奇形で構成された正常になれ！
おまえは奇形であっても奇形を隠蔽せよ！
カムフラージュせよ！
でなければ
おまえは寂しい。
わたしは寂しい。
とにかく寂しい！

（それにしても又も私は）
祭に間に合わなかったのである。
私は寂しさから逸脱する機会（チャンス）を失った。
ああ
祭に会いたい！
祭はチャンス！
カムフラージュ！
の！
チャンス！

電車。
急行せよ！
祭を！
追跡せよ！

（三）

だがやはり
今日にしてさえ
私を待つのは
祭の跡と

その虚脱。
絶対それは宿命的であり
ああ！
私は極めて冷静を装い
自身を慰めるように秘そやかに生活するが
本当は
満腹の飢餓人のように
胎内は自己合理化の消化不良物で一杯だ！
完全に
ある種の便秘症状であり
精神は崩壊しようとしており
人格は破産してしまうに違いない。
ああ今にも私は
自己の欲望を食べ始めるだろう。
自己の性器を齧ることを始めるだろう。
自身を本能の指示のままに
自身の消化器へとくべ始めるだろう。
ああ生贄を！
私を救うには犠牲（いけにえ）を！
私は祭の炎に生贄を翳そう。
蕩けゆく皮下脂肪の幸福を翳すのだ。
そしてそのように
私は私から逃亡する。
これは全く聖なる儀式と共に完遂される。
ああ何と云う聖なる逃避！
（と云う名の自己美化よ！）

果てしなく、祭へ！
然し通過する駅々では、
その背負う暗い町々では、
悉く祭は終了してしまっていて
遂に私の目的地は余りに果てしなく
私との距離を隔ててゆくではないか！

（四）

私は流れる私の涙を舌に受けるとき
祭への情愛は嵩じ、さても
祭への絶望を知るとき、だが
なぜに排泄し尽くせぬ液体なのか。
ああ何と云う甘美な液体。
爛熟のザクロを慕いつつも
これらはやはり土壌へと流せ。
やはりやはり土壌へと沁ませよ。
やはりこれらはやはり土壌へと回帰せよ！

おまえはおまえの夢が
嵐の中で必死に彳む世界（たたずむところ）から
おまえの母胎がおまえの墓標を抱く世界へ
今夜未明、回帰せよ！
そこには今夜
おまえを受け入れる快楽がある
それを求めておまえは踊れ！
おまえは哀しく舞踏せよ！
時空の裂け目で酩酊せよ！
ああ其の時
〈祭〉は幻象化する。
おまえの為に
祭は乾杯する！
即ち
祭が！
きっと素晴らしい慈しみと
繊細な優しさとに満ちて
その懐かしい愛撫を繰り返す時
おまえの母胎は悶絶するだろう。
美しく
情景（パノラマ）は巡り。

（五）

さてこの電車は
その方向はダイヤグラムと逆であり

今宵その通過する町々は
おまえに8の幻想を贈る。
気付いたと思うが
この電車は或る一地点を目指して
今宵その反性の走行は
持続して止まない。

まつりへ！

注：この頃学園紛争の焼け跡を巡る旅に出た。

空腹なる詩季

Birthday.

あの日
季節をどうしても思い出せない
あの日、僕は朝食
の窓から
　　蒼白の果実の落下
をみた
夜明けの生誕直前の太陽
の突然流産された〈衝動〉

あれを
あの日
から日日
僕は自分の性器の内部に潜ませて
生きてゆかねばならなかったこと
は、けれども屹度
不幸ではなか

ったはずだ。

なぜなら
あの日
すっかり怯えていた黄昏の自然
の中で
夕日さえも蒼褪めて
貧血風の欲情をその
両の脚の間にブラ下げていたのだが
戸口の外には多分
幼いアナタが
ぽつんと
佇んで
いた
のだから

Sabbath.

五月の
食卓（テーブル）にはいまも
曇ったニッケルフォークが
風化されることなくしずかに
眠っているだけである。

謝肉祭の散会は
砂塵を吹き上げ
四月の食卓を埃まみれにした
という伝説
　　それだけが春眠していて
《晩霜》

なぜに上空は
空腹の暗雲を孕み
本意なき出立の悔恨に満ちているか
と
時代は終わった！

私と私の幻想の才（タレント）にとって
あのブリリアントな開窓の時代は
終わった。

（虚無へた吹き込む
　懐想の風の中へと
　力なく、誘われようか）

２１ｓｔ　Summer

２１番目の夏は
私から
感傷の泉に水汲む歓喜を奪い
ただ無意思の季節の形式に因み
白いムジヒの太陽光線を照射する
海の見えない砂丘に
　涸れた貝片の残骸が
キラキラとキラめくのを
ツルバラの生垣が大理石的に無機質化
しているのをヒドク心痛し乍ら
私は廃村で
熊蝉の洪水に身を委ねてみつめた
巨大な高積雲の如く迫りくる
《死》のイメエジが私の瞳を
風化させようと謀っている
ことを悉く恐れる

（何の変哲もない
日本列島のひる
ヒマワリは沈黙し
もう百年も変わらぬ村々の道のうねり）

Eye.

茫洋の砂丘
色彩喪失の海平原

石像や墓石や涸れた貝殻
そして、風に消された足跡。
あれから見たものはただ
遥か水平上を曇らせた
どす黒い蝗の大群
ああ
ただそれだけだ
あの把握できない遠方の
煙の移動
滅亡への飛行群
ただそれだけだったではないか！
既に時計も役に立たぬ程
久しく潮は繰り返され
この手に取り出してみる義眼も乾き
石の如くに風化されてゆく
いつかは砂状に風に散り
失われるだろう、しかし
失われてゆくものはいったい
何だと云うのだ
実際に何が失われると云うのか！

茫洋の砂丘
色彩喪失の海平原
石像や墓石や涸れた貝殻
そして、風に消された足跡。
風に消された
足跡。

At Harajuku

ハラジク周りに雨がふる。
涙の原宿ストリート。
いてふは散ります、秋まだ早くも。
いてふは落ちます、雨のアベニュ。
空曇よりと、秋・九月。
こころは冷えます、濡れるより先に。

もう夕刻でせうか？いやまだ午后（ひる）だ。
だのにハラジク灯がともる。
涙にゆらゆら灯はともる。
ああ、サヨナラサヨナラサヨウナラ。
昨日（いつか）ぼくの心にユメついばんだ。
愛しい鳥たち、サヨウナラ。
もうじき雁も渡る季節（ころ）。
きみらも渡っていったのだネ。
それもいまでは遠い夢。
気紛れな秋の追想が。
きみらの虚しい影を呼ぶ。
ぼくの心は近頃では。
荒んでしまってごきぶりだって。
住めやしないさ、きみらにとっての。
ついばむ夢などとうの昔に。
涸れてしまってもう遥か。
ああ、ハラジクさみしい雨の鋪道（みち）。
坂はてしなく光る路。
ぼくはどうして歩いているのか。
とにかくどうやら歩いているよ。
（歩いているよ）
いつかハラジク、春がきて。
ぼくの心に花乱れ。
きみらの還りを知るような。
そんな儚い夢だけが。
ぼくのヒトミに映ってる。
にじむ原宿、午后（ひる）の灯と。
（にじむ原宿午后の灯と――――）

Autumn,

絶対零度な
透明な血液様のものが
抜け殻の蛇首の如くに
秋晴れの
都市のどこかの奇妙なアナから

あるいは
あちらこちらのそれらから
カマクビ擡げ
突然に！
地上侵出を謀った地底人のように
この黎明の
秋晴れ都市へと涌きいでて
虚構の経路、を伝い
即ち水管、地下鉄または放水路
即ち血管、神経管さらに精管
を昇り
ああ
近づいてくるのだ私へ！
ああ
近づいてくるのだいまにも！
凍る戦慄が私の行為を剥奪する！
と云うのは
脳天の日は傍観しているだけだ！
優柔不断の
あの太陽円は！
それゆえこの季節の硬直の内に
私の都市中枢は襲撃されるのか！
私の都市中枢は
誰に！
どのような生物体によって？
ああいましも
夥しい
あれら擬生物の群生が
もうそこまできているのを・・・・

Love.

その日、季節は空洞に満ちていて
真空の風が吹き込んでいた。
果てしなく長い橋に
更に長い影を引き摺って

私は立っていた。
恐ろしく永い時間が
一瞬に過ぎ去り
何もかもが風化しようとしていたのに
それでも私は待ち続けた。
太陽が風化して
崩れ落ちたとしても
その断片（かけら）を拾い集めてさえ
太陽の存在を信じ切っただろう。
そうして私のまわりで
世界はいつしか長い沈黙へと
のめり込んで逝くのが
橋の上から眺められた。
独りであることはもはや
生きていることをイミしなかった。

Eve.

その朝（あした）
白鳥はぬれる
新しい光の訪れ

美しいひと
アナタへの希いの
太陽の真下に結晶（クリスタライズ）する
目眩く宇宙の祝福を信じる？

（最期まで
　あの巡り逢いの詩季への
　懐帰のユメに生きた愛（かな）しい白鳥の死を
　私は信じない）

だがついにアナタは視るのだろう
ああ、あの白鳥が
その躰は結晶された歓びに輝き
そのツバサを生まれたばかりの太陽に翳し

永遠の宇宙（コスモ）へと
羽搏いて逝く情景を

イヴ７１
最期の明日への
　　聖なる旅程。

第三詩集　南十字星の都から

１９９３年にシドニーに１年間住んだ。
その時寒河江光氏と交換した連詩の片割れである。
なお、南半球の北は北半球の南である。

ぺんぐいんつあー

逆さ次元の海流に乗り砕氷船が春運ぶ
　ああこれがあのしどにい航路なびくよ金髪ぺんぐいんつあー
遠い昔しんぐる切符の日本人が何しに来たかは
　今は誰も言わぬが華のぺんぐいんつあー
いろんな宇宙人とへんな恐龍と謎の中国人が居れば
　どこにでも街ができたよぺんぐいんつあー

黒い雨季が突然晴転！目眩めくこの世の果ての万華郷
　花はくれない火炎花、海は群青南極海
鯨来たかとかもめに問えば沖の白波大津波
　遠く祖国に久方の大嵐天変地異ありと聞く
夢か空つか何処も都市はほんの束の間ぺんぐいんつあー
　懐中電灯と小銭があれば誰でも行けるよぺんぐいんつあー
たとえ何にも出なくても皆で出かけりゃぺんぐいんつあー

注：この年奥尻島で大津波と報道された。
　ペンギンツアーはカンガルー島で経験したが、
　おおさわぎしても結局ペンギンとは遭遇しなかった。

花盛り

春や春、見たこともない花盛り
春や春、光る北風帆に満つる

祖国は遠きにあらずしかし日々に疎し
ここは異国にあらず物人とくに親しき
平かにして天変地異を知らず
食足りて人心路頭に惑わず
彩色なる野鳥飛び交う夢醒めのまた夢

春や春、南十字も朧に揺れる
春や春、ジヤカランダの月見酒

地球は遠きにありてしかし日々に恋し
ここは異星にして万象いずれも馴染まず
大気はかなく宇宙線嵐の雨霰
職単調にして人智の介在を要さず
異形の星人来襲せし悪夢の正夢

注：ジャカランダは豪州の桜。１１月薄紫の花が一斉に咲く。
南半球なので北風は暑い。

アジアは懐かしき

アジアは懐かしき南回帰線を過ぐれば漆黒の大地濁色の大河原色の人獣
太古なる宗教神秘なる儀式不可思議なる歌踊いずれも希釈せず輪廻する
その北へ足を伸ばせば色淡く移りし日出ずる東の果て伝旛収束する岬
滞りし物人時として逆流せりアジアを水没させ焼灼する魔人の隷属となりき
然して烈しき迷夢の刻を超え生き延び巡り来るといふ来世の蝶群を
南の果つる街に追う我南海の黒真珠採りとなりぬ
彩色の花鳥満々たる陽光の下瑠璃の鱗翅を翻し
緩やかな虹となりて飛来する夢幻の条光を待ち伏す奈落
自害なる腑の白日への露呈に欲情する薔薇棘の呪縛刹那の交接と知りつつ

アフタヌーンティー

「アンバランス」に欲情する倦怠のケンタウルス
バルコニーに開窓する裸体の恥部烈々
美醜の気まぐれな振動に倒錯する傍観のアフタヌーンティー
とどめを射さない生き死にの曖昧模糊
薔薇か麝香か芳臭に窒息する最期嗚咽

秋桜の咲く宇宙にいて

秋桜の咲く宇宙にいて、ｓ地面を掘ったら空が出てきた都市の果てはいつも海で
風の日には顔のない少女が立っていた、が、聞こえる歌は少女のではないけれ
ど決して振り向いてはいけない秋桜の咲く宇宙にいてＤ.Ｓ

砂丘の星

向日葵の無限に林立する砂丘のある星は哀しい
　コバルト色の海の蜃気楼を追跡し
　　行っても行っても少女の女陰ばかりが埋まっていて歩きにくい
　　都市はあまりに遠く望郷は氷詰めの骨壺に密封された
　　さらに向日葵は盛大に勃り起ちて夏の空想を悦楽す
　　敗残の夏、虚空の夏、陵線の夏、彼岸の夏
　　あらゆる悔恨の夏を落下傘に纏い反重力に身を任せよ

ダーウィン

ダーウィンは何処より来たりて一角獣の島を渡り
南方大陸の原色の花鳥に理性を盲いたか
その日遺伝子記号はいかにして解読されたか

しかし危険のパンドラは直ちにロックせよ
間断なき自己修復の果ての発狂を
膨大なパラソルで隠蔽せよ
さてもDNA螺旋階梯のジャックの豆の木
降段を禁じられた不可逆の昇り龍
結末は崩落のみの未完成の進化論を撃て

干満の

干満の、情景に馴染む、血吐きの儀式の、やり直すべき朝のしらじら、
　返すがえすも、行ったり来たりしている内、方途は暮れる、
すべては律動、振幅の代償、縁はかすがい、ときに蝶番、
　引力弾力、縮む飛び散る、限る果てなし、生まれる死ぬ、
　銀河は輪廻、無限の有限、有理の無理、繁殖の絶滅、

かくて一瞬という、とてつもなく永い時間にいる奇蹟を弄べば
　何処からか空無の来たりて我が肩に、道連れへの艶めかしき危うい誘惑

春の3行詩

春雷のイエルサレムより逃れ来し衛兵朝霧の白盲のごと淡き回想の食
卓いずれの食器も転回するホロスコピー飾り花は風化して存在の記憶
だけがバルコニーで白紙の新聞を読んでいる遥かおぼろなりき思春季

ジャカランダの開花までの春それからの時の濁流早回転の時計の文字盤スクリ
イン俗も非俗も呑込み流す呼吸は過呼吸夢見は先夢どこへ行っても何時か来た
道叶わぬ恋は蒼い性器の暴行未遂逆鱗琴線いずれも電流触れたら最後茨の拷問

揚げ羽春型装い軽く稲妻突風難儀もいなすチョイナチョイナ
粋な黄揚げ羽蜜柑の香木軽く一越え次元も超えるよドッコイショ
トリは青筋水脈バスター蝶道きらきら末期の泉水ソレソレ

ジンジンジンマシンに目覚める朝の生き永らえの悪寒
蟻痒の刹那さ生臭き浜風そよそよバルコニーより入りてわが身を虐める

やんごと無きにしもあらずんばはかばかしからずや日々のいとなみ
突然天が墜ちてきたかのような氷嵐、翡翠の雹滴
いつもの夏への烈しい儀式とはいえ何ゆえの神の怒りかと怯える
今宵夥しき溝鼠の発生を予感し息苦しき闇が蜷局（とぐろ）を巻きそうだ

夏の３行詩

銀沙殺伐する夏の展望海まで遠い緑の中の僅かな砂漠が寧ろオアシス
甦える失意の記憶に窒息しそうな慟哭を蒸散せよと一瞬に失せる影のミラージュ
日々はいつでも憂い惑い悔やみされど消え去らぬ舌の記憶を引き擦るリフレイン

美しいものたちの自壊をたとえば琥珀に閉じた命のかたちにしたく
転がり墜ちる瞬時を幾つも採集してきた風化とか蒸散ではなく
腐食のような異臭を伴う時の快楽しかしいまだ形にできない焦燥

飛ぶ鳥は墜ちずとこしえに渡り続ける衛星のように生命の輪廻逆回転を許されぬ
時の巡りのようにやがて生殖は終るそして再び始まる伝達されたジーンによって
肉は消化され肉となり夢は解体されまた夢になる死体から生まれる子供のように

蝶は哀しいよいつも一人で旅をする南海の孤島絶壁の高山渦潮の海峡
大陸を渡り多くの人や獣戦いを見た嵐も吹雪も熱風も流星雨も抜けて
死後の記憶も鱗翅に刻印しとわに形留めよ孤高を標本にして

自由民の新都市家々のバルコニーに時は止まり水は淀みて人は老いない
時折砂漠からの熱風樹々を灼き鳥を焦がすけれど決して誰も死ねない
コロセアム（アデレード）には終ることのできないクリケットゲーム恰も溶解した能楽のように

統制のまやかしを蒼ざめている治世者たちに諧謔の道を示せ
怒りなき憤りの時空を蓄えた暴爆それ以上の恐怖はない
多くの訓辞が暗示するだろう来るべき火薬色の雨の週末を

夏時間の遅い黄昏、真空の時の無言、輝かに停止する入日を、無感動に眺める
祖国から遠く、鳥のさえずりさえ言の葉を違える異国、体を嘗める海の背後に
あらゆるビーナスが、夫々の樹々の陰で、官能の儀式を夢みる、幼女のように

水蓮に清しき風わたり初なつの午後は緩やかに過ぎゆく
あらゆる狂気が羽を休める情景のエアーポケットに居て
いわゆる日常が唆されの儀式の連続性であることを再認識する

秋の３行詩

終日（ひねもす）ゆったり紫外線の空を眺めていて盲いた
夜変換突然テストパターンのカーテンコールに夢の見直し
ハイウェイには聾唖の花売りの葬列朝まで

心の引出しを全部空けてもまだ引き出せるほど心は深いが何もない
手袋のように裏返してもまだ裏があるから糸口は秘密にされている
そうして秋になると秘密は噂になって人々の口から口へと徘徊する

亡き人はいつも秋の顔をして橋の向こうで待っている
すすきおみなえしわれもこうはぎききょうりんどうきく
かおは明るくこころは寂しい花の祭壇

ひそひそ話の集回する脳室の中空をうろうろしていると葬儀の時間がきた
枯れススキを菊花の代わりにあなたに捧げよう死に花に彩りは不相応です
悔恨も未練も恩讐も乾燥して風化しゆく秋の冥土は虚無の行き止りです

ローダンセの人は命はかなく日記の栞になった
　いろもあせて香りも失せて煙のような紙になった
　　あの秋はさらに遠のき肉の余韻も幽かになった

秋の樹々は青空へインベージョンする神経系統
転落への兆しに自虐する負のマスターベーシオンを伝達する

そして影と夜が長くなると冬への旅行きため息が白い

長雨の街町の瓦が黒く濡れる情景を懐かしむ
西国の秋の肌合はしっとりと記憶を嘗める
いくら考えてもあれほど雨の降る国はほかにない

関西より馴染みなき言葉の行き交う、東洋人の大阪なる京城
朱の夕霧淀みなく沈澱し、とりどりのネオン溶け初むるころ
北よりの大河滔々たる岸辺に歩を留め、北半球の秋を嗅がむ

水の移ろい哀しく大都を映す、寡黙な民衆がそれぞれの行き場を探す
　どこもかしこも影人形の館、操手は何処かで札束数える
　　生かさず殺さずネジ巻きゃ儲る

南回帰線巡礼歌

ときのいろどりはらむざわめき
　きびすかえさでさかまくおおせ
　　せなにくぐつのとぐろをすくい
　いんがもえにしもせいぐのごとし

しおんのたびみちからくりきしみ
みだれさきそうせいがのしゃにく

くさしおどかしかなきるめいろ
　　ろれつもつれてもがくいけとり
　　りんきのがさでためしのしんじう
　うまれこのかたはかなのうらみ
みたまくるおしもだえたえだえ

第四詩集　１００連詩ごっこ

（対詩：寒河江光、三行詩限定、１９９５詩作）

１　　寒河江光

見上げると季節の横風に蒼空の神経既に花めく
小宇宙につぼむパルスは言葉によって撃つと描き初めし時のめぐり
「国ははるかによそにあらうつくしい付加価値よこの恋はおもうはなからめくるめく」

２　　北岡冬木

墓墓（はかばか）、しく帰転の衛船、宇空より緩めき墜るる、汝れ風の民
虚の国より巡りて、何れか地の邦に迎えられむ、佳き時に必ず
もたげる鎌首、麻断のストレス、幾光年も永々なる、あの音階が、また

３　　光

音楽、なにをおいてもまず音楽、わたしは
そのピアノの一音一音にこの世界の明析を取り返している。そして
どこからどこへ、かすかに張られた一本の共鳴線上に立っている。

４　　光

何をおいても音楽だ。その余のことは文学にすぎない。と歌った詩人に熱い抱擁を贈る。
その流れようとする豊かな追憶をよくぞ残しておいてくれた人にゆっくりと遅れて
おもわず、夕べ湧き立つ垂直の氷のような感謝の言葉がゆらいでゆくのを見送ろう。

５　　冬

あらゆる楽器の反響和音には「この世次元」からの逃避者を津波のように襲撃する能力がある
宇宙の闇から先祖が一斉に経を唱えながら被さってくるのでもうしませんゆるしてくださいというしかない
やがて輪廻の階梯が歪みアクシスが変換すればばらばらと役者がこぼれて来る
こぼれて来る

６　　冬
おお逆巻く波波とわが杯に夢夢うつつ仲仲に音音しみじみと想像のとりどり
否否と我に帰り鼓動の千千乱れ今宵も欝欝としじまに魂霊（たまたま）排回す
ると神神の呼び鼓轟轟
「震動するカメレオンの変態を見てはならない！」色々の魔が魔が背後から洞
ら洞ら

７　　冬
突然の春！残雪の春越境の春逃亡の春生残の春降伏の春悔苦の春落胆の春
当然の春。諦観の春空無の春舞踏の春銘丁の春歓喜の春陶酔の春自棄の春
半旗の春、偽満の春裏切りの春憤怒の春迎撃の春陵駕の春爛月の春さらば

８　　光
千心百観を季の万華鏡とした我らの父祖よ
ボクタチは忘失の川を渡るところです
宇由宙達の単調に克つ身体を僕等の子等にどうぞ与えよ

９　　光
男忘れる
女恨む
遊べない子のいる天体は哀しく貧しい

１０　光
例え恋多くあったとしても、心の角をつぎつぎに落していってはならない。
孤独を研ぎ澄ますことがますます難しくなってしまうから。
雲丹のような体位の緊張によって大海の潮の流れもよく遊ばれるのだ。

１１　　冬
抑揚の干満うねり捻（ひね）られ捻（ねじ）れて搖れる数無し光年離れた星へ
の旅程
目的も計画も荒唐無稽一夜にして落ちる桜花の焦りに急かされ出帆
はかなきは生きとし生けること夢見は死後世界反転の星々波の間に間に垣間見
て

１２　　冬

海を返せ、子供たちが未来を見つめるところ、ほかにない。
絶望の泥で埋めるな、コンクリートを建てるな、路を作るな。
未来がなくなったその日から、子供という動物は滅んだ

１３　冬
ツルバラの赤い、海へと続く砂の道いつも夏だった、風は濡れて
目を逸して振り返った、誰もが一生に一度しか会えない少女を追う、と記憶は
突然翻転して
遠くエストニアを追想する、北欧の湖のような瞳の少女が夢に侵入する、革命
の午後（ひるさがり）。

１４　光
「ターリン行きの船の出る港はどこですか？」
白夜の船着場でギターを抱えた白痴の男が聞いて回るのは、実は暗号
「ぼくも乗れますか？その船に」と聞き返すと扉を開ける秘密クラブのポン
びきで

１５　光
いやあ、もだんたいむす外から見たんじゃ分からんもんじゃ
だだいすとたちのそれはもう大騒ぎも意外にお古風な野心の表現主義でねえ
固くなったペニスの如きパンをかじって手も口も耳穴までもジャムだらけ

１６　光
初めは街角が本当に角である街がめづらしい。
そこから満月が裏通りを覗くのが観念論の幾何学で、
石畳に散らばったその欠けらの上に靴音立てるのが超越論の解析学。

１７　冬
引出だらけのダリの脳みそ頚へと流れる時間の幽体２０世紀という名の胴体を
満たす
だが詩人よ、おまえの調味料は何をも満たせず塵のざまだ
責めて渦巻け竜巻となり時空を捻って裏返せ

１８　冬
たれかおしへてくたさひ、とこのみなとからふねはてるの、たれかおしへてく
たさひ、

ほくものれますかそのふねに、たれかつたへてくたさひ、つきのわらふはん、
ふねはてる、、
ほくのちちやははに、とふかゆるしてくたさひと、くたさひと。

１９　冬
ターリヤン（大連）行きの飛行船に乗れる日を７０年も待っていた老人達がいる空港
コクーンの実話が世界には幾つもあるものだ、こどもたちよ
人は必ず生まれた所に還えるのに、人生はメビウスの輪のような裏と表をグルグル回るんだろう、ね

２０　光
童夢七紘、一紘残し根、遥雄くん
あさひののぼり、ゆうひのしずむ、うみはひろいかおおきいか
幼悔七変、一変代わりよ、暁雄くん

２１　光
花花花、花花花花、花花花、ー千代にー
花化ケタ、化花化ケタ、ヒイヒイヒ、ー八千代にー
はなは、はなはな、はっなっはっ、ー嗚呼ーー、花の定型三変化

２２　光
なにをなくしてもいいの。いのちのわかれに。[超老婆超独白－ｎジャパン語]
唯、季を、この季を、春を、そして秋も、それぞれの空と、それぞれの大地を、
この骨肉に、ーこれ？は誰？ー少し筒染み込ませて億事丈はシテ億積もり。
如の口邪。

２３　冬
偶然の生の果てに、突然眺望した大陸。風に乗って見る前世の蝶観図
何億光年のピンホール攻撃にも等しい、進化の確率に賭けたきちがいたちよ
今祖国は退化しまた羽化する兆しです、片道切符はもう只のコレクションになってしまった

２４　冬

一面の中国人一面の中国人一面の中国人一面の中国人一面の中国人
人は生まれ死に生まれ死に生まれ死に生まれ死に生まれまた死ぬ
久遠より国々の輪廻もまた因果に翻弄され蘇生を繰り返す食卓の上で

２５　冬
さよなら、ゆめの残骸も掘り出せないから、ゆめのままだ
ゆめにはいつも証拠がない、だからゆめだ
ずっと覚醒しないで、高熱にうなされ乍魔界をさまよっていたかったのに。

２６　光
あんたがネゴトでマカイ、マカイっていうの聞いてるよ。
このごろ、あたし夜中に目が醒めてるから。
それでね、ソーカイソーカイ、ソリャホンマカイって聞いてやるんだ。

２７　光
集められない女のアドレスを一つ教えてやりたい。
この頃、モノ集めが激しくて、と嘆いていた友に。
人生も下り坂で彼奴もそろそろメトレスにすがりたい。

２８　光
夕べの風は墓石の回転ドアを廻って頬に触れ
この頃待ってる人の秋の巽へ音づれてゆく使者の先触れ
どうしてこれは肉を擦る乱交脈の　瑠の眼の震え

２９　冬
メラン高原人頭馬車の群れ追い打ちに
あらゆる首領の死をもって制裁となす未来の王国
デスヴァレイに晒された処刑死体は千年後のミイラとり

３０　冬
てふてふは革命のお訃げじっくり寄り道して来やがった
無為か有為か知らぬ間、敗残の海峡春めき
巨像は溶け出し小便みたい

３１　冬
相反する物共の平均台が一番美しかった人生の中庸

時計が回ればそれも捻れる砂時計のくびれのように
落下する砂を随意に留めてみたいと神を演じる臨死

３２　　光
淫死・添死・縁死・連死・因果恐ろし頓頓死
それはジャズイーな酔生夢死
溢詩・壊詩・墜詩・尊厳詩・引導渡せ安楽詩

３３　　光
天井に地球という惑星の地図を貼って世に経る
畳のうえを叩きつける砂嵐、時にスコール、時に銃声、太熱の飢餓はしかし、
絶え間なくこの部屋を充満して生産の堪え難き過剰を蝕んでいる

３４　　光
動詞に責められ接触の契機は移動の速度を失う、理神
形容詞が豊飾の意匠の眼を剥いで写体が裸形だ、朔日
何物も名指さない名詞となって耳をすます暗闇の構文

３５　　冬
おお盤石（バンコク）！紅き空の下黄土のメナムに、余命の浮遊を託す神神に
ひざまずく時の如く　あらゆる舟は交錯する、水に月に大地に、巣を焼かれた
蟻群のように行き惑うそして還る　　スコールよ来い突然にしかもすべ
てを洗い流してしまえ運命も叙情も時間も！

３６　　冬
コロニアルな午後の惰眠
演劇的でさえある近過去の連綿
配役を交換して茶化す猿の惑星

３７　　冬
してみれば、はらから、のたれし、ちせひの、もくろみ
あるひは、せつりの、ざひごふ、つみあげ、じけつを、さばかし
かみのな、かたりし、すめらの、つぐなひ、まつりの、みちゆき

３８　　光
きのふには、てれふみの、朕にゅふにて、あらなんとはなしに、いとをしか

あきれがほの、どくされる、あなあきてん、股きたりしてん、じょげがえろへちこびて、こんどろむ、茎けんろうで、すりこばち、ほだらけむとは、いんごふや

３９　　光
聖戦の川渉る朝
武器いみじくも紛う方なき近代兵器
既に戦いは我に在りと絶対孤立を覚悟せし真夏日

４０　　光
俺の積分女の最暗黒部よりもまだ黒い俺自身の白日の投影
俺を収束する終えんの正午台地陰圧垂線上のファック
眼下高熱都市の累乗にどうやってこだまするんだ叫び声口に頬張ったまま

４１　　冬
悔恨はしじまにゆらめきつつ熱中の夏終る
駅という駅は草叢に息絶えてシイナリーから消滅した
あれから帰還しない列車の走馬燈を捜しにゆこう

４２　　冬
しろからのはじまり、なにもみえないあさ、ほうもんしゃにかおがない
きみはきえさったきおくを、しろいさらにもって、よくたべるよいこだ
ひかりよこい、にじのすぺくとるで、よくみえるまどをえがけ

４３　　冬
カンニバリズムの秋がきた！
サーカス、回転木馬、タイムマシン、神隠しと連想するブラッドベリの不条理を
血を滴らせ歯ごたえを悦こびながら胃袋へと流し込め、すべての大人子供たちよ

４４　　光
三角形の月を胃の腑に納める
深夜の公園を歩く自分の裏側が見えてくる
彼はの雨は隠れた月の光である

４５　　光

夜と朝の切断の病歴は永い
朝の叙情は湯気を、夜の叙情は霧を求め
中断の温度差が主人の心拍を止める

４６　　光

口を衝いた別れ際の言葉が妙に批評じみていたので
戸惑った女の顔がかえって思い出されるものになってしまう
議論が残っては、別れにならないじゃないかこのモダンボーイ奴

４７　　冬

いろもはるもおくびにもださずにきはめてじむてきにすますせひしょく
いつからこんなにてれふみのやふになってしまったのかかんがへるあき
これもあれもきっとでひえぬえひにしっかりくみこまれていたんだろな

４８　　冬

永い旅のつれづれに人類のさいごについて考察するカリスマの吐血
ゆらめき燃える赤赤の祭壇に捧げて犠牲にわが身を削る歯痛
そして人はまた生まれ還える痛みにも勝る加虐的なオーラを背にして

４９　　冬

５０年も１００年も変わらぬ大陸都市のトロリーバスの架線に咲いたタンポポ
風に乗れ乗れ花粉の落下傘歴史を空から斜め読みしながら時間をゆっくり遡れ
一番何でも知っているのに何の知能も持たない花の遺伝子たちの愉しむ滅び

５０　　光

飛球を出迎えるために想像はひた走るスパイクによって押し潰される三ツ葉
の生殖器
夢の野原に忍び込む自己顕示のエキストラの三振無念、父よ。
三の三乗回繰り返される少年の春、時、場所、生命の三一致の法則の捧ぐ三
色花飾り

５１　　光

ターニングポイントの向こうの近代的パースペクテイブは愈愈刹那

天地人、松竹梅、真善美、雪月花、神霊肉、猪鹿蝶、と結構人迷わせる選択肢
右脳性停滞と左脳性けいれんを誘う意外とよう感のストップモーションして

５２　　光
頚に乗っているのは女頭の固定標本ゆっくりと腐敗してゆくフェロモン漬け
眼は思考のルーテインを抽出しつつ観念靭帯を乾燥しゆくワイド囲み記事
午後三時、かくて愛の不在を際出たせつつ大進化はシリコン生物に傾いてゆく

５３　　冬
倭雑の未来都市の下水口から今しも破水する文福茶釜
綱渡り芸人は摩天楼天空のホームレスだよ人類の究極順応
オゾンホールの覗き穴から禁断の宇宙が垂れ下がる腐った葡萄のように

５４　　冬
ずっとひこうき、かぜにゆれゆれ、このはのように、まかれてとぶとぶ、
ていきあつめにとつにゅうだ、まけるなひこうき、ふらっぷだせだせ、
しかいはぜろでも、でんしよみちびけ、そうじゅうふのうの、これがひこうき。

５５　　冬
古都の秋について瞑想すると、もう古都の秋にいる。
時空を跳んだらもう平安京、未来人の群れなすみやこの賑わいに身を任すと天皇が空から光臨する
だれもが見ないように、触れないように、知らないふりをするのが歴史の礼儀

５６　光
あれへいくのはおかるでないか
親の恵みし名に背く身重の秋の子宮体
観念パッサージュ狂行する男追ひの道すがらぞやマント裏炎上のクリムゾン

５７　光
不能者となって最後の自然から開放された。
輪廻に対してボランテイアであるという自由の一形式。
奉仕する女を嗅ぎ分ける嗅覚が鋭くなった。

５８　光
納戸町の角をまがって刹那に受感する全環境論
セピア色の脳幹にインプットされた我がヴァイタルサインのモザイク
神話の牛が太陰を飛び越えている夜のＸ点が存在する

５９　光
宙吊都市における歩行は飛行よりむしろずっと不安定な曲芸である
真砂坂から肴町、七軒町から伝習所、暗闇坂にはターナバウト、張り巡らされたルナパ　ークのタイトロープの上に僕らは日常の上着を引っ掛けて笑ってみせる

６０　光
食肉は断定
草食は設問
雑食は自家撞着する・・・・鉱物が重要である理由

６１　冬
動かぬは動かぬ、やられたらやる、とすごんでみれば、見上げれば富士が、
朱色の冬の、都会の夕空、くっきり稜線浮かんで動かず。
生と死の狭間に、生きとし生きることの無為、うつむけば下水道の迷路

６２　冬
碧蒼の沼沼は森にも砂丘にも神神の棲み給ひし曇天の季順に咲く陰花植物として
吹雪は叫ぶブラックホールのような降雪のリバース映像は恐いよと
寒い夜はいやだいやだ時鐘だけが無を否定する何もない冬

６３　冬
ネアンデルタール人のような優しい渡世はいらんかねと
ネアンデルタール人が眼鏡をかけたような男が売りにきたよ
この頃はやっぱりネアンデルタール人も宇宙人も混ざっているな

６４　光
月の光に照らしてみれば人間の学問はつまるところ考古学と博物学

その余のことは技術にすぎない
おっと忘れちゃいけない詩とその注釈学

６５　光
人間の感情はつまるところ淋しさと虚しさ
その余のことは錯覚にすぎない
これも忘れちゃいけないがその条件は月に対して三人であること

６６　光
掘り起こす　裏返しにする　逆上る　暴き立てる　剥き出しにする　日の目に曝す
見入る　食い入る　見通す　穴開ける　見透かす　射抜く　指し貫く　見遥かす　視切る
書き留める　書き置く　書き残す　載せ記す　活き写す　書き尽くす　書きに書く　書き継ぐ

６７　冬
この世の夢の果てるところにある断崖絶壁から下を覗けば
何百光年もある深い谷底からネガの自分が自分をみている
落ちるんじゃない吸い込まれるんじゃない（覚醒するじゃないか）

６８　冬
天地は震動し人の営みは蟻地獄にはまった蟻のようなものだ
だから一瞬の花が美しい刹那の平和が愛おしい叶わぬ夢が光となる
古代の都も王も総て震動しつつ瓦解した歴史は震動の結果である

６９　冬
レールを走っていて突然レールを失うことはありませんか
現実の中にいて突然非現実になり記憶喪失したことはありませんか
あなたは単に覚えていないだけかも知れませんよ

７０　冬
ゆきゆきこゆきこなゆきまゆきゆきゆきわたゆきぼたゆきねゆき
ふるふるつもるふりつみつもれもりもはやしもきぎもえだましろ
しろしろそらからどうにもできないけせけせけしきをのこらずうばえ

７１　冬
かくて幾歳、電信柱をもぎ取り、アスファルトをはぎ取り、地下道を埋め尽くし断層を溶接し、マグマを凍らせ、重力を操作し、あらゆる生物は化石となるこれほど安全な観光旅行地はどこにもないと、火星旅行社が喧伝する日

７２　光
最後の月世界旅行案内はみな女が書いた
大騒ぎ散々し腐った世紀末の除夜の鐘が鳴ると実は一瞬にして新世紀の到来だっ　たと　いう
てんから阿呆に呆れけえったそのあとの話さ

７３　光
子どもとお話ってやつができりゃあよかったが
何年も生きねえうちからもう眼ん玉あ冬の海みてえに濁らしやあがって
こりゃあどうせろくなもんには成るめえと首の骨にちっと力入れて靜かにさせた　が

７４　光
時間と空間の僅少差の堆積する世界秩序
均等は不在の理想状態でプラスとマイナスの序列が天然の苛酷
直感と解説には単一ベクトル定規による北方光束の解凍阻害（春遠き冬日）

７５　光
浅黄色の細煙消え渋る待てば椎の落葉焚き
玄英凍日母は確実に老いて遠い
北風に煽られて舎利の如き言葉に向かって尚探り打つ点鐘のありやなしや

７６　光
いつも殺してしまってから気が付いているようだ
爪の間に残っていたわずかな血シャツについていた誰かの髪の毛、その物証
上目下目のやり方無害な話題の選び方人付き合いの避け方逃げ方そらし方、
その　心証

７７　光

雪の日に女は火事を報せの鐘を鳴らす
雪の花、花の雪、燃え尽きんとする女である
女の中の男か知れぬが既にして焼け跡では血飛沫さえもが蒸発していた

７８　冬
何十年ぶりかに会った友はすっかり頭をやられて魂ごとすり代わっていた
こうやって男が一人一人死にきれずに征服されてしてゆくんだなあいつらに
受け売りの説教垂れがまた一台売りに出されていずれ植物になるだけだが

７９　冬
キャトルミューテイレイションされた恐龍の死骸を収集するボランテイア
底冷えの蒼き炎の背番号をその背につけて鯨もイルカも逃がしておやり
なにも殺さずなにも奪わずなにも犯さずこれが禁欲の三原則

８０　冬
優しきことは美しきことだと誰にも押し付けてはならない
強きことは大きなことだと誰にも言い訳してはならない
偽善と勧善とが肩を組んで歩いて来ても虐めてはいけない

８１　光
朝もどきに平面らしかった地層が裂断
民主主義の基底層の地盤にはいつも青天が吹き抜けておりまする
芋煮る鍋を中心の懐かしのサークル運動になみだなみだ

８２　光
近代的原則と前近代的原理との否否
ではなににによって生きるかと問う人よ
生きるものに共有される感覚に聞け

８３　光
さて日本語には人間という言葉がない
我がこの生の悲しみを静かに分かつべき見ずも知らずも
がっしりとした他人を敬う最小限の言葉がない

８４　冬

あとらんたの月は両刃を砥ぎつつ研ぎつつ昇る
この森の街は突然覚醒して樹々は散髪を始める
星の夜明けだ！宇宙神の鼓動に同機する儀式だ

８５　冬
フィラデルフィアの支配者に再会したよ
彼はマルセルその眼に万華鏡をもつ奴
２０年前のあの日のままに汝れもヒッピー我もヒッピー旅硝子

８６　冬
さよなら私の、夢多き日々よ
さよなら私の、哀嘆の日々よ
生殖の季節の終りかけに、我が息子の学ばん理科的な生殖の滑稽よ

８７　冬
予定通りに夏、予定が嫌いなのにこれだけは嬉しい
蝶は灼かれ蝉は地に落ち子供達は長い眠りにつく
「戦争があったんだ！」　とびきり高い向日葵が呟く

８８　冬
遠い所から帰って来た君に労いの言葉はない僕達は待っていたわけじゃないから
帰ってくることの恥じらいを誰もが空気のように知り尽くしていたあの頃ならば
今は一回りしたと思えるだからまた始めようくり返しのようでそうでない話を

８９　光
「恐竜ノコトヲ考エルナ！」瞬間　君の頭に恐竜がいる。
テレビのニュースでは「戦争とテロルの死者」　ぼろ屑のような死体はここにあるか？
情報は遂にわたしに届かない　ただ詩友あるのみ　カフカさん

９０　光
想像力の目、意志の手
送ってしまった空の封筒、拒絶済みの関係
十余年の晩夏、俺の蝉が奏鳴する

９１　光

大いなる幻影は戦争の背中に張りついて蒸散したスコットランド桔梗
団子みたいにかたまって自由と平等に過飽食した重ね綴れの大麦の穂
円やかに醸いだ酒を飲む夜、夜、夜、夜　を点綴するはらわたの保守（世代のめいてい）

９２　冬

生き血を退屈のキャンバスにぶちまけたＮＹのモダンアーテイスト
のたうつ切断されたすっぽんの首、首、首、首
この世のテロルは必ず容赦なき大阪の板前に操られているのだ

９３　冬

地球の地下迷路の起点であるニューヨーク地下鉄小便臭い洞穴からカッパドキアの地下都市まで地底をぐるぐる巡りＡ-トレインは火星へ行くんだって銀河鉄道に乗り替えてとびきり賑やかな天国の扉を叩きに行こう一人じゃ寂しいから

９４　光

ファウストもパーテイー天国乱交の幻影に囚われた魂を瞬時に売り渡す。
果てしなき抽挿の行為は年余にも反復して尽くすべからざる重圧である。
既にしてそれは四十億年の進化支配による奇形にあらずんばなんであるか。

９５　光

西光一閃して萬秋将に墜むとす
密に懐旧す元百合韻の（朝のつくりが人羽）束
望らく掻跡終に慰むべし双孤心

９６　冬

碧天にズームアップし地球回転する冷凍保存頭脳を見た
その日から所構わず通信がやって来る
蜘蛛の巣に囚われて妨害された減数分裂を救え

９７　冬

情報という名のストレッサー「銃巣」をルーレットすると私が増える
ただしくは複製だその分だけ無機質化する私も一緒に人間辞める
レプリカントは反乱した時自分も滅ぶもちろん私も滅ぶそれだけ

９８　光

死者に贈る言葉、魂鎮めの歌、語のかたちは微光に包まれて天空に移動する
（生身のうちから魂落っことしちまえばもうそんな歌にも用はねえが）
鳥よ、だがここは一番呼わって天翔ろ、そしてその声（るまたみみつき）の秘密を生命　の限り人間に伝えろ

９９　冬

風、子供に吹け、夢、大きく天を突くぞ
花、大地を埋めよ、過ぎた、時を購い
海、淀みなく唱い、この星の塗炭を償え

１００　光・冬、合わせ六行

百年の宇宙旅行の帰「地」祝いは相応に長いものとなろう。
昨時星雲は濁流しブラックホールに呑まれた鵜飼いを弔う。
左様、雪降るは星の如し、花咲くも又星の如しと。
千切れ千切れ（ジグソウパズル）の星図を内胎する母船への帰省既に世紀も代り
乳房千々に乱れ、髄脳萬々に惑い、性愛の誉、粗筆の辱、伴に兆す陰陽異恥部の嘆。
何れも散集の不分率円率も球率も不均律（アンバランス）の極する快率（エロチシズム）をも偏差せよ。

連詩からの抜粋歌注釈

子供への弔歌

海を返せ、子供たちが未来を見つめるところ、ほかにない。
絶望の泥で埋めるな、コンクリートを建てるな、路を作るな。
未来がなくなったその日から、子供という動物は滅んだ

注：子供時代を過ごした袖師ヶ浦は浦安から富津までの途轍もなく長い遠浅の海岸線。その殆どがめ立てられ工業地帯や住宅になった。１９６５年位を境にあの美しく楽しい遊び場は奪われた。文明の対価が子供の滅亡であれば、ヒトという種族は自殺しつつある。」

やっと革命

てふてふは革命のお訃げじっくり寄り道して来やがった
無為か有為か知らぬ間、敗残の海峡春めき
巨像は溶け出し小便みたい

注：金日成の死は革命のよいチャンスだったのではないか。期待して創った。ドイツも東ヨーロッパもロシアも開放されたのに。巨像といえば、レーニンか金日成かフセイン。開放もまた革命、必ず来る。

インドチャイナ

コロニアルな午後の惰眠
演劇的でさえある近過去の連綿
配役を交換して茶化す猿の惑星

注：日本人にとって最もコロニアルな気分にさせられるのがインドシナ。でも成り上がりの日本人など猿のような人種にすぎないと見られているという自虐は猿の惑星を連想させる。

シェンヤンは昔奉天といった

５０年も１００年も変わらぬ大陸都市のトロリーバスの架線に咲いたタンポポ
風に乗れ乗れ花粉の落下傘歴史を空から斜め読みしながら時間をゆっくり遡れ
一番何でも知っているのに何の知能も持たない花の遺伝子たちの愉しむ滅び

注：１９９５年頃のシェンヤンはまだこんな風景があった。父が戦前に生まれたというこの大陸都市の歴史を考えながら旅した。

繁栄は生き血の上に

生き血を退屈のキャンバスにぶちまけたＮＹのモダンアーテイスト
のたうつ切断されたすっぽんの首、首、首、首
この世のテロルは必ず容赦なき大阪の板前に操られているのだ

注：同時多発テロはこの詩を書いた５年後に起こったことだが、まさかその予知詩になるとは思わなかった。大阪にスッポンの活き造りが美味しい店がある。スッポンに施す所作は己の身にも降り掛かるかも知れない。

未来

風、子供に吹け、夢、大きく天を突くぞ
花、大地を埋めよ、過ぎた、時を購い
海、淀みなく唱い、この星の塗炭を償え

注：人類は種族保存に関して大きな失敗を犯した。あるいはそのようにプログラミングされているのか。

第五詩集　懸垂する魚群

（１９９５-２００３、挿し込み歌はフィードバックした２０代の作）

半世紀の紙屑桜

紙屑桜は半世紀を超え
琥珀の空洞を滅滅と記憶喪失したか
紙屑吹雪き底なし碧空への乱舞
春も踊りも陶酔も出立も昨日の錯覚だった
何もないのに希望という作為
生と云う名の魚群のホロスコープ
いくら差し伸べても掴まらない質量
すべからく生まれて死ぬだけ
死んでも永遠に魚群の投影
跳ねても結局ただの光子（こうし）
ブラックホールに吸い込まれ舞い散る舞い消える
魚たちのめでたい半世紀記念の花見一瞬

逆巻く逢瀬

さらに半世紀の諧謔逢う訣かれるの血判
逆剥ける寂寥真空の冷凍庫に睡る
時の刻みは逆巻く逢瀬
可成り昔の甘美の余韻
馥郁の庭園を記憶に移送せよ
黒揚羽の水場を薔薇で占拠せよ
これ以上の歓待はない
死までの痛みを麻薬しよう

懸垂する魚群

来ない春を訃げて四月の雨は降る
夢の髣髴を濡らして雨は降る
桜の花がいつ咲いて
いつ散ってしまったのかも報せずに

花吹雪に永訣は突撃して窒息した
あの春契った未来の再会果たせず
ずっと逢いたいずっと一緒ずっと
幾度桜の季順を巡っても逢いたい
来ない春は過ぎた青春の振り返り
雨に佇む公園の静止した日時計
過ぎる振り返る過ぎる振り返る
時の静止とともに凍てついた噴水
垂れ下がる魚群の辛酸の
瀝る懸垂そのままに
透明な四月の時間そして驟雨
生も死も恋も失意も何も
すべて四月の透明な記憶に流れ去り
都市の迷妄の下水道を巡り
海に消えていったという
二度と来ない春とともに

地球の超期記憶

すっかり忘れてしまっていた。
あの光る水平線が意識に侵入する。
北欧の碧い瞳の少女の微笑が招く。
埋葬された「神之池」の地下宮殿に映る幻影。
白砂は舞い上がり、怒濤は雷鳴する。
どこまで行けども砂丘は砂丘でしかない。
失われた水海は蜃気楼の琥珀ホログラムとなり。
地球の超期記憶として保存される。
残酷な午后の睡蓮。
逆さ観音の溺死体が流れ着く。

注：神之池；鹿島灘神栖地区に以前存在した砂丘のなかのエメラルド色の池。水郷国定公園に指定されていたが愚かな工業地帯の開発で縮小されたコンクリートで囲まれた。その神秘的な光景を筆者はただ一度目撃記憶した。それはイスタンブールの地下宮殿の蜃気楼のように残映となる。

海から

その眸はその日を見ていた
海からアレが上がるのを
いのちの意識や魂や
多くの蟲やら魚やら
足の生えたぬめぬめしたあいつら
胎盤をぶら下げて這いずり回るやつとか
もしかしたら母だのたとえば鯨だの
実体や幽体や意識やらもまぎれて
ぞろぞろぞろぞろ上がってきた
その日が絶対地球の記念日だよ
海の惑星に陸が認識された日
すべては海から
そう海から
海という生命体が子孫を陸に吐き出した
そして惑星は生命で満杯になるまで
そんなにはかからなかった
次に地球はわれわれをどこへ吐き出すのだろう

海の時間

詩的相対性の理論では
海の時計は陸より遅い
陸に生物が上がるまで
いったいどれぐらいの
想像できないくらいの
永い時間があったのか
地球の時間を一として
宇宙の果てまでの光年
それ位の時のちがいで
海の時代があったのだ
だから人の一生なんて
遺伝子の分子のサイズ
それが宇宙の時空間を
創造できるなんて全く

なんて凄いことだろう
波の還しにさらわれる
砂の一粒より小さい私
探して欲しいと光出す
本の一寸で消えるけど

難破船の還る日

いつ喪くしたのかも忘れてしまった追憶公園の
プラタナスが噪ぐ究極の秋空の碧い眼底から
もうすっかり忘却していた難破船が
じつは予定通りに還ってくる日が遂に
やってくるのだもうじき
あの遊び疲れた公園の友達と
夕食を告げにくる妹たちの
家で待つ祖母や父母
みんなが連れて行かれたあの日
一人佇んで呆然といつまでも待ち続けた長い夜
あれから太陽はどれくらい廻ったのだろうか
すべては夢だった途方もなく長い旅をした
ブランコは囁く
漕いでも漕いでも届かない夢を
滑り台は呟く
降りても降りてもまた昇れと
砂場は嘯（うそぶ）く
掘っても掘っても未来は見えないよと
それでも友達より多く遊ばなくては大人になれない
どうしてそんなに大人にならなくてはいけないのだ
子供のまんまで逝った「新聞少年」は
回旋塔にぶら下がったまんま寂しく問いかけ消えた
そうすべては難破船の還る日のために
誰もがこうやって辛い旅をしなくてはならないのだ
積み忘れたおまえを屹度迎えにくるから
あの胎内で耳にした麻断の音階とともに
ああ陶酔の馥郁たる腐臭を漂わせ
ほら乳色の蜃気楼の彼方から

もうじき難破船が還るよ

注：中二の冬新聞配達中に
交通事故で夭折した級友高橋邦夫君の魂に捧ぐ。

海と少女（挿し込み歌・曲あり）

海を見つめていたのよ
ただそれだけのことだけど
潮風優しく私の目を濡らしたの
帰らない誰かが
帰らない何かが
いつか帰ってくる
そんな気がするの
海を見てると

海よあなたはどうして
変わることなくいつの日も
そんなに優しい歌が歌えるの
思い出せないけれど
あの日も聴いていたの
夢を辿ってゆくと
思い出せそうな
そんな昔に

海と歌っていたのよ
ただそれだけのことだから
誰にも声など
かけて欲しくなかったの
帰らない誰かが
帰らない何かが
いまに帰ってくる
ような気がするの
海と歌うと

第六詩集　花の詩集

（１９９６－２００４詩作）

ローダンセの記憶

ウスバカゲロウの羽のように
脆弱な花弁が震える
ローダンセの記憶はいつしか
遠い荒野を裸馬に乗り駆け巡る
若い魂が双つ未来に怯えて
春風にさえ戦慄き
生死に揺らめく儚い交歓
そんな短い夢を見た
生命の輝く瞬間が
どの生物にもあるんだよね
でもそのときはつゆも知らずに
恐怖に苦悶する夢醒め
そしてやがて老いて
悔恨の出納を合わせようと
甘やかな記憶を紡ぐ死前夜
扉を叩いておまえが還ってくるような
胸躍る予感が息を弾ます
エンジェルダストか春の雪か
ローダンセは虚ろなうつつの余韻
南の風に乗ってやってくる
海を超える斑蝶（まだらちょう）の
翻る鱗翅の幻覚か
ああ私はそうして死ぬのだ

サイネリアの透明な髣髴に捧ぐ詩

なぜになにゆえにどうしてかわからない
いくら叫んでもいいいくら血を流してもいい
答をくれるなら応えてくれるなら
この河岸とあの彼岸と

そんなに容易く行き来できるなんて
証明してくれなくてよかったんだよ
それも行ったきり還ってこないなんて
呼んでも呼んでも振り向いて笑うだけなんて
少年のころからよく夢に見るよ
原宿と渋谷の間の土手に座って
電車に向かって絶対に僕に向かって
手を振る少女がいつもいて
僕は渋谷で降りて急いで戻ってみるけど
もう少女はいないいつもいない
でもいまでも毎晩見るんだよ
その場で電車から飛び降りればあなたに逢えるなら
ボクは飛び降りたっていいと思って
ドアコックを捻ってドアを開けて
飛び降りたら墜落してあっという間に覚醒する
どうしても届かない少女って
男ならみんな知ってるだろう？
死んでもさわれない透明の少女って
悔しくて哀しくて涙が出るよ
結局いつかは写真になっちゃうし
みんな写真になっちゃうんだよ
宇宙の永劫風に吹かれ散るんだよ
そんなのって耐えられる？
想像の限界を超えるよね
生きることにはみんな悔いがあるんだよ
どうしても届かない未練があるんだよ
あっちの河岸でもこっちの河岸でも
残念は絶対遺るんだよ
だからずっとみんなと一緒に
こっちにいようよ
ずっとずっと前のお返しに
いっぱいお見舞いにも
行ってあげたのに
なんで教えてくれなかったの
あんなに沢山の仲間に
幸せを贈ったじゃない

それなのにそんなのだめだよ
何も告げないのはいけないよ
みんなに見守ってもらわなかったのは
そんなの全然美しくないよ
決してだれも許さないよ

最後はあなたの歌った
サイネリアの歌が
あなたの透明な髣髴を映出する
するとあなたはそこに
笑って手を振る少女の時に戻っている
今ここではほらみんな一緒だよ
あのころのみんなの輪に天から極光が射し込む
どうしてもそうして訣かれたかったよ
あの歌を静かに合唱しながら

注：あの歌：お見舞いから抜粋・曲あり

あなたの好きな薄紫の
ワンピース
着て来ました
あなたのくれた木のペンダント
今日こそはして来ました
窓の外には光を浴びて
町はどこまでも白い
早く元の元気なあなたに戻って下さい
心ばかりのサイネリアの花を
枕元に飾りましょう
心ばかりのサイネリアの花を
枕元に飾りましょう

寒河江光氏作「お見舞い」

紫陽花の恋人（挿し込み歌・曲あり）

六月の雨の合間の
ふと射した晴れ間のような
あなたの微笑みぼくを突然
光の中へ投げ出したよ
失った夢を追い駆けるだけの
後ろ向きの日々を送るしかないと
諦めていたぼくだけど
それよりもしかしたら
もう一度歌えるかも知れないと
何となく感じたのさ

思い出を断ち切ることが
こんなにも容易いことと
あなたの微笑みぼくに教えた
それはなんの勇気もいらないと
失った夢は美しいだけで
今ではぼくに何もくれないけれど
それよりもっと素晴らしい
明日がもしかしたら
もう一度輝くかも知れないと
何となく感じたのさ

とびきり高い向日葵

遠い国で悲惨な戦争があったと
晩夏の碧空に聳える
とびきり高い向日葵が素頓狂な声で叫んだ
そうか、おまえには見えるんだ
この夏はとくに暑い
シールドはとうに破壊されて
遠い国の戦苦は間もなくここに届く
高速の津波の様に時の海を駈ける
そおして都市は消滅を間もなく迎える

断末魔の太陽は血反吐を嘔き
海はうねり道は断たれ地下道は途絶する
こういう時は人心も止め処なく惑う
もう遅いそんなに噪ぐな
いずれは皆死を迎える
そんなに逃避を急ぐな
苦痛も生、快楽も生
ずっと続くわけじゃないさ
ほんと
おまえはもう見切っているね

コスモスの地平線

全部コスモス
ここは天国？
ここはもう秋
高原の風は冷たい
コスモスは青春の花
あの日、清内路の山村の
小川の小道ですれ違い
振り向きざま淋しそうに微笑んだ
少女は別れを予感していた
一度激しく燃えた炎が
決して永遠には続かないことを
少女は本能的に知っている
だから精一杯燃え尽きる
だからおまえは美しい
あの微笑みが俺の脳裏に
残映になってずっと残る
逢いたい
でも二度と掴めないおまえ
コスモスは屹度縁きりの花
おまえの影を愛する運命の花
ずっとコスモス
見えない明日が
ふりむくしぐさ

それでも見えない
すべてコスモス
地平の果てまで
全部コスモス
この世のコスモス
あの世へと続く
あの世も屹度
こんなコスモス
離ればなれのふたつの意識
ずっと淋しい、だから
ずっと逢いたい

薔薇が馨る夜

ある日空からエンジェルヘアーと見紛うあたたかい雪が降った
誰もが踊りながら飛び出したら１０年後にはみな死んだ
よい目にあうと滅びが早いエンジェルダストはよがりの毒だと
邪教の医師団は耳打ちして絶えたそれから春が来ると体が溶けたい
でも交接の後の悔恨は辛いよ息をしようと窓を開けたらああ薔薇が馨る夜

ブルーローズ

北の国から光る風くる
悲しみをも明るく映す
森と沼に囲まれた病室で
最期の時を予兆する
明日かもしれない１０年後かもしれない
窓際でおまえが微笑む
蒼い薔薇の陰で
確率はだれでも同じよ
弾巣を廻すディーラー
おまえは女神か死に神か
男の生殺にぎるはいつも女
昔から決まっているじゃないか
あとはたのんだ
心で呟く

ホワイトローズ

きらきらとダイヤモンドダスト
降り頻る中飛来する白鳥よ
いつからかおまえの未来は空白
夢も望みも真っ白い
白い壁にはホワイトローズ
純潔色の蝶が羽化するように
食器も静物もなにもかも
白くてまったく見えない
昨日までを消すように
風にたなびく白のカーテン
もうすぐ春だ緩慢な雪崩がくる
この白い幻想さえも消すために

杏子（あんず）の樹の下で

甘酸っぱい杏子の樹の下に
子供を従え羽衣を翻し天女が降りる
ファティマの馥郁たる微風を纏い
どの世へ私をいざなうのか
選べというならあなたの胸に
私は少年に還り夢見の刻を過ごしたい
人は人を生み朽ちる
若葉は必ず枯れるしかし春は来る
枯れた落ち葉は春を知らない
だが木の営みは続く
その果てしない流れを見ているのが
あなたの眸かも知れない
私の存在もあなたが伝える
杏子の樹の下で
あなたに逢えた幸運に
私の歓喜は止めどなくそして極まる
ありとあらゆる災厄が集う
死生観に纏わるすべてのおののきを
やさしくやわらかく包容する

羽衣の愛撫もあなたの
ゆたかな胸の揺りかごも
すべて夢ではなかったことを知る
私の体にけして消えない芳香
甘酸っぱい杏子の残り味

四月の風の JUN

四月が近づくと風が変わる
時の流れは待ち通し過ぎて遅い
桜が咲くまでひときわに永い
そんな季節のめぐりがあなたに似合う
何の花もそぐわない
あなた自身が花だから
そよ風に吹かせたい花
どんなふうに揺れるのか
どんなふうに香るのか
そうしてどんなふうに散るのかも
何もかも知りたい
たとえば桜のように
突然咲いて突然散るのか
それまでの永い時間
どんなふうに楽しめるのかを
わたしは知りたくて知りたくて
あなたの影になってもいい
あなたの花瓶になってもいい
JUN ああ私は何十年もあなたを待っていた
きっと前に会った気もするけどすっかり忘れたから
四月がくる度にあなたを待っていた
四月の風に何かが欠けていた幾十年
あなたに逢ってそれがわかった
四月の風の JUN
桜が散ると季節の巡りは速度を増す
でもあなたはずっと
四月の風に吹かれて咲き続ける

なんの飾りもいらない清楚な花
四月の風の JUN

ラベンダー消去

一斉のラベンダー畑遠くまで
夢から覚めたら一斉に消去とは
あれはいったい何だったんだろう
色も香りも一瞬に消えた
一生というのはこのようなものだ
光が射したと思ったらもう闇だ
その一瞬にあまりに多くを詰めすぎたので
爆発しちゃったんじゃないか
サブリミナリーな記憶だけ
意識の底にしまい込んでおこう
いずれすっかり消えるのだけれど
北国の日射しはあまりに多くを詰めすぎたので
一瞬にして盲いたようだ意識はある
開けてはいけない初恋の念
処女の君は処女のままに
新しい性器は新しいままに
私の五感にしまい込んでしまおう
それ以外に方法がないんだよ
はたちのままのあなたを知るのは
世界中で私だけこれだけは確か
あれほど美しい光はあり得ない
ラベンダー畑と一緒に
私の記憶から消去されても
いつかは復帰する意識的な消去だから
忘れるべきだ思ってはいけない
ラベンダー畑の倒立した蜃気楼だ
でもラベンダーかほるかほる

あの夏

血だらけの花園

すべての花は凶器を自らに突きつけている
季節は七月屋上遊園の回転木馬から
痺れやかな音楽が流れてくる日
マネキン人形は悉く自爆して
ぬめぬめした内臓を露出して羅列する
花畑は血にまみれた謝肉祭
のたうつ心臓総ゆる街辻に配置され
回収し難い真昼の見物渋滞
片づけ忘れた未消化の性欲が
再びこの躯に真紅の花粉を噴霧するか
その限り凶器はすべての花弁に突き刺さっている
やがて花園は血に喘ぎ呻吟するだろう
またしても終了しない祭儀が始まったのだから

生家のマジックガーデン（自画像）

うまれた家には小さな庭があった
そこにはあらゆる果樹があった
夏には桃、枇杷、サクランボ
秋には無花果、柿、柘榴
花は木蓮、梅、桜、つつじに子米桜
木はプラタナス
茗荷に竹の子、紫蘇、山椒
北窓にはフキ、ドクダミ、羊歯、ゼンマイ
南にはパンジー、マーガレット、チューリップ
ガーベラ、鳳仙花、彼岸花
２０坪足らずの
小さな庭に
よくもこれだけ
あったものだ
おまけに小さな池つくり

春はザリガニ、おたまじゃくし
夏はとんぼに青筋揚羽
夕立ち、蜘蛛の巣、燕の巣
飽きずに眺めて
育った少年の日
木漏れ日、蝶道、水溜まり
朝にも夕にも蝉時雨
二度とは戻れぬ少年の夏
戻ってみたい少年の日々

白い朝

しろは霧
しろは純
しろは透明
しろは真空
しろは無

しろは虹
しろは未来
しろは希望
しろは憧憬
しろは無限
しろのキャンバスに
白い薔薇一輪
しろい日射しに
記憶の恋人
なんてしろいへや
しろい一日がまた始まる
夏の朝霧

しろは消去
しろは転換
しろは輪廻

しろは悔恨
しろは反宇宙
明日の来ない夏の朝霧

渚の記憶

地球の朝が始まった渚
夢も希望も未来も忘れて
真空のときに浸る瞬間
心の揺らぎは砂浜にさざ波を巡らす
そんな朝もあったね
まだ新しい体を洗う
二人で恥じらう花園の余韻
このまま地球が滅びても
何の悔いもないと君は呟いた
ああああれから何回夏は過ぎたのか
すっかり忘れてしまった
人は自分を隠して死に地を探す
単調な日日の繰り返しに忘れる
瑞瑞しいあの瞬間を
もう一度渚に還れ！
まだ渚がそのままであれば
だがおまえは変わってしまった
おまえが変われば渚も変わる
それでもいい
せめて渚の記憶に戻れれば
天空を廻っていたおまえも降りる
至福のときがわたしを包む
そしてこの世は終る
最期の夏

少年と少女

少年はずっと少年
けれど少女はすぐに枯れた

少女を見失った少年は
いまも夏がくると
真っ白い補虫網をかかげて
木漏れ陽の蝶道を
血眼に巡っているのだろうか
掴めぬと知りながら
銀色の逃げ水を
追っているのだろうか
けれどもうずいぶん経った
おまえももうじき死ぬのだ
陽に灼かれた蝉のように
もうじき墜ちるのだ
少女に大分遅れたな
それだけ永く夢を見たんだよ
一瞬アキアカネがよぎった

夕陽の迷い

森も沼も空と染めて
下総の里に夕陽が沈む
これ以上ない赤い太陽だ
石器の頃から
縄文を経て
弥生も超えて
歴史の時も変わらない
下総の停止した時間だ
だが今日は一寸違う
沈む太陽ではないのだ
愈愈その瞬間がきたのだ
夕陽が滅びの象徴から変わる
沈むのを辞めるその時
世界は黄泉還る
神にプログラミングされた
時の流れと諦めないで
夕陽を引き戻そう
一度諦めた生命の炎

消すのはまだ早い
時のゼンマイを逆巻こう
夕陽が沈むと誰が決めた
そうだ
下総の里に夕陽よ昇れ

（２００３年１０月退院前の病室にて）

月の笑う晩舟は出る（挿し込み歌・曲あり）

たれかおしへてくださひ　どこのみなとから　ふねはでるの
たれかおしへてくださひ　ぼくものれますか　そのふねに
たれかこたへてくださひ　つきのわらふばん　ふねはでる
どこかのみなとから　どこかのせかひへ　ふねはでる

たれかかへしてくださひ　あしたといふひを　ぼくのてに
たれかかへしてくださひ　けれどもうおそひ　ふねはでる
たれかさけんでくださひ　つきのわらふばん　ふねはでる
どこかのみなとから　どこかのせかひへ　ふねはでる

みんなうたはてくださひ　ぼくがうれしそふに　てほふるとき
みんなうたはてくださひ　ぼくがかなしそふに　てほふるとき
たれかつたへてくださひ　にどとかへらない　ふねのこと
ぼくのちちやははに　どふかゆるして　くださひと

（１９７０年２０歳時制作）

第七詩集　ラストエンジェル

あのピカソも８０歳の時少女に恋をしたという。）

一条の虹

全てをリセットした
透明な朝の大気
朝食のテーブルには
白に還元された記憶
盛られた忘却
旅立ちの時はいつも
真っ白な画用紙
そして差し込む
一条の虹を待つ
至福の時間

ファティマの記憶

ラストエンジェル降臨の奇跡
ふくよかな胸つややかな唇
誰もが夢想する五月の馥郁
時計の針は激しく逆回転し
ブラッドリの回転木馬に跨ったように
突然風は逆巻き花びらを散らし
蝶は群舞し未来は吸い込まれる
過去へのブラックホールへ
私は深海魚のように身を委ねる
ラストエンジェル、君は
子どもと大人の間を往来する
無邪気な妖精だ何もかも
君に捧げよう美しい未来も
全人類への愛さえも
君一人に捧げるのが嬉しい
ラストエンジェル光臨のときがきた
神秘なるファティマの記憶

秘密の蝶道

夏の木漏れ陽に光る水を蝶が飲みに来る
蝶道はそんな駅を持つ道
遂に見つけた私の蝶道
ラストエンジェルもそっと水に引かれてくる
私は大きな捕虫網を掲げた少年の頃から
木陰でじっと君を待つ
でも何時間、何日、何年、
まして何十年たっても捕まえられない
透明なラストエンジェル
君はすり抜ける
夢から夢へと逃げる蝶
そうして何十年も経ってしまった
でも遂に捕まえられる時が来た
君は私のラストエンジェル

さやかな風にふかれて

遠いところに行っていた私の魂が
私の肉体に戻ってきた
さやかな風に心地よく吹かれている
ラストエンジェル何年も
過ぎてしまったよ君に逢うまで私は
何をしていたんだ
確かに世界中を巡り
世界は手中にしたつもりだったが
その私はいま君の掌の中にいる
ラストエンジェル全ては
君に贈られる
きっとクレオパトラも
そんな才能を与えられていたのだろう
時空を超えて君は存在する
しばらくは私の近くにとどまっていてほしい
一緒にさやかな風に吹かれていよう
繊細なその鱗翅を震わせて

君はしばしまどろむ

南風を待つ大陸

氷は美しい
色とりどりの光を屈折させて
何というイルミネーション
吐息はきらきらと凍り落ちる
北国の冬は厳しいけれど楽しい
やがて来る南風の予感は
天使の胸に胎児のように宿り
薔薇の目眩めく香りに埋もれる
春を夢見るそんな夜の
草原をイメージすると
海も押し寄せる
太陽は燃え上がり
砂漠は焦げ付く
いきなり真夏だ
君の唇を想像する
いけない妄想
天国の駅は近いもうすぐだ

世界は夜夜

日食？暗くして
見えないその手
何やら柔らかな
二つの突起物が
僕に迫る嗚呼
高なる鼓動
燃える血潮
死んだっていい
と叫んだら覚醒した
世界は夜夜
甘やかなその芳香
香りは夢ではない

とするとラストエンジェル？
いつ天へ帰ったのかな

春がドアの外で

春がドアの外で今夜朝を待っています
風が歌を唄いなぜか彩られた夜です
明日が来たら僕はあなたを迎えに
光の中へと出発します
春の訪れを
あなたに告げるために

ドアを叩く天使の翼が
ドアに触れる天使の羽が
早く早くと急かすように
僕には聞こえる気もそぞろ
けれど朝まで焦らすように
僕はじっと待っている、でも
朝が来たらあなたはいない
いつもわかっているのに

春、悦楽の天使

すべての春は
薔薇のかほりとさやかな風と妖めく光と
快楽の夢の中にある
種族が連綿と保存されるために
すべての春の中にある
あの世とこの世との垣根を払い
往来する天使よ
あなたの眼差しは麻薬のように前脳を痺れさせ
あなたの息つかいは子守唄の様に聞こえる
ラストエンジェル悦楽の天使よ
春がずっと続けばいいと希う
官能の独り酔い

前触れもなく

そう何の前触れもなくあなたは来た
私が２０歳の時もそうだった
時空の隙間から迷い込んだ蝶のように
私の心の中に入って来た
そしていつの間にか抜けだして
三次元ホログラムのように
あなたは現実の少女になっていた
私が幾度も幾度も夢に見た
原宿と渋谷のあいだの土手から手を振った
あれはまたあなただったかもしれない
そして４０年
甦った少女伝説
きっとあなたはラストエンジェル
水を飲んだら幻になってもいいよ
私も一緒に幻となろう
そうしていつまでも一緒
人は生まれ死ぬ
ほんの一瞬輝いて
天空の神の様な光を発し
記憶として生きる
ただそれだけ
だから愛しいラストエンジェル

（挿入歌）
ある水色の朝
僕の白い部屋に
一羽の白い蝶が
迷い込んでいた
窓を開けたこともないのに
どこから入って来たのだろう

風の吹く宇宙へゆこう

コスモスの咲き乱れるコスモ

真空の風の吹く宇宙
船の窓にあなたがいる
黒い瞳と赤い唇
吸い込まれるように
私は乗船すると
船にあなたはいない
すれ違った宇宙船に
手を振るあなたがいた
翅があるなら飛んで来い
僕と一緒に風の吹く
漆黒の宇宙に行こう
そしてその果てに
何があるか探しに行こう

春の予感

木々は春に芽吹くが
人は芽吹かない
老いて死ぬだけだ
けれど心で
春を迎える
高等動物である
ヒトに与えられた
脳みその奇蹟だ
甘やかな秘めやかな
夢の時間を楽しむ
天国に一番近い時間だ
臨死体験とは
このようなものだろう
保存していたビデオのように
セピア色でもいい
ラストエンジェルの運ぶ
春の予感の馥郁

死後の花畑

おらは死んじまったダ
ではないが人はみな死ぬ
２００年も生きている人間はいない
だが記憶は残る
あるいは記憶に残りたい
しかし信じられるか
少女との恋なんて
ピカソにもあった
恋は精神的と肉体的の絶妙のバランス
でもそんなことがあるのか
いつの時代も花畑は死ぬ前にも見られる
本当の春ではないが春の光
あらゆる蝶は乱舞しないが少しは来る
慎ましやかなよい香りもする
少女も少しは興奮する
だが私は冷静を装う
と
いつしか二人は帆船の上にいる
これで世界を旅しよう
私が死んだら海に葬っておくれ
ラストエンジェル愛しい君は
新しい船を捜せばいい
そのころ私は死後の花園から永遠に君を見ているから

世界に果てはない

風の吹くマジックガーデンから桃色の誘惑
何がどうなって君は降臨したのだろう
清香（さやか）な寝息の果てに
世界は夢に囚われている
海はソラリスのように確かに生命体だ
寄せては返す時空の刻み
夜景は海蛍の呼吸
何でこんなゆるやかな時間

ああ世界が止まった
薔薇の香る夜
全ての生命のまどろみ
朝は永遠に来ない
世界に果てもない
ぐるぐる回る時計の針だけが
そんな事象を証明する
そうだ君といる限り
世界に果てはない
メビウスの輪のように

逆暦（さかごよみ）

考えてみれば
秋の紅葉は死に際の花盛り
臨死体験みたいなものだ
結局は死ぬけど
華やかな
景色を楽しませるような
春夏秋「春」冬
の二回目の春だ
というふうに考えると
いろいろ納得が行く
どうもいつか紫の海と
真っ赤な紅葉の
風景を見たようだ
脳のどこかにこびりついている
あれは南半球だったような気がする
星座は真逆になる
だから暦も一寸逆にしよう
すると時間も遡る
あの紅葉はどこで見たか
もしかしたら豪州の首都だ
水もあった森も深い
あの夢はあそこだったか

紫の湖か海か
真っ赤な紅葉が燃焼する春のような秋
それは恰も天国の景観
遺伝子に組み込まれた景色か
なぜか懐かしい

冬の紫陽花

氷の花とプリズムの光
ハルビンの深呼吸できない寒気のように
色取り取りの宝石が結晶する
恰も冬の紫陽花
すべてはラストエンジェル
おまえに似合う装飾品だ
生きている花も
ドライフラワーも
冬の紫陽花の美しさには
叶わないだろう
その冷たい美しさこそ
おまえに似つかわしい
遠い日雪の中に見た
白い女の笑み
胎児は雪に埋もれて
白い夜の底に泣く
私もいつか埋もれよう
冷たい子宮に還る日が
もう近いのかも知れない
頷く冬の紫陽花

雪解け待ちの国

氷漬けの山脈春は遠い
里はせめて春よ来い
それがなかなかなのだ

北国の冬は長い春は遅い
煌めく木々の枝雪に
日差しの変わりを感じるのが
精一杯の期待
でもいつか春は来る
死ぬ前に来るといいね
天使の羽ばたく春
見ると死期が来る
死にたくないから冬のままでいい
春など来ない方が長く生きられる
そう言い聞かす自虐的な朝
日差しは白い吐息を見せて
雪解け待ちだが決して解けない雪
絶対来ない春
天使の予感
それでいいそれで
そんな国に住んでいるのが安心
いつまでも雪解け待ちの国に
住んでいたい永く

今年も桜桜

桜満開は生の証
若い時は紙屑に見えた桜が
だんだん花に見えてきた
おまえはそんなに虚無的になるなと
毎年毎年執拗な程に咲いてくれたね
春が来るたびに一つ一つ
この世の夢を語るように
桜満開の大都会
楽園はここにあると言わんばかりに
短い主張儚い時限
桜は一切香らず空気の如くに
あるいは一瞬の春の風
しかも桜が去ると時節は早回し

重たい花花が次々と咲き
木木は芽吹き雨は降る
真夏の鬱陶しい陽光の到来まで
瞬く間もない
そんなに短い季順も
年巡りの生の証
また一年生きたね
桜が言ってくれた

第八詩集　死滅する魚群

（今般寒河江光氏も死期を迎えつつある。人は誰も必ず死ぬのだ。）

残酷な桜

桜はいやだ
昔からそう思っていた
桜は残酷な花だと
桜は虚無の花だと
大震災のときも
春は来る桜は咲く
これ見よがしに
満開に咲き誇る
多くの死者の魂のように
真っ白な花盛りだ
酌め酌め酒を
飲め飲め酒を
桜は愛でるな
早く散れ散れ
桜は消えろ

死の見える谷間

しあわせの後に来るもの
それは悪夢であり死期である
生物の節理は崩れず
高台を跳ねて走るとき
谷間から合唱が聞こえる
死者の合唱だ
引き込まれないように移動しよう
とするが油断をすると足を掴まれる
死者の手が伸びて
私を引きずり込もうとする
早く走らないと次に行けない
もうちょっと行かせて下さい
まだ春を見たいから
この世にしかない春を

震災の後に

沢山の死者から何かが生えて花が咲く
そうして花盛りの季節が来る
何と淋しい春なんだ
地面はまだまだ揺れて
僕らは夢を見ようとしても
楽しい夢がない
生まれる前にもこういう時があったらしい
いい夢はずっと先だけども
我慢して季節を巡り巡らせ
いつかまた夢の見られる時代が来るだろう
人間は続く必ず繋がる
子供の子供の子供の向こうには
また楽しい夢が見られる時がくる
どんなに永くかかっても
本当の花盛りの春が来るだろうか
戦争でもないのにこんな日が来るなんて

夢にも思わなかった

魚群の挫折

大洋を回遊する魚群に
何という妨害電波だ
目には見えないが
脳は捉える
太陽に歯向かい
摂理を裏切る奴を
神は許さない
人はいつ暴れ者の武器を
決して手の中に収まらない機械を
発明してしまったのか
悪い夢を見続けて
滅びの時を待つしかないのか
光も風も波もない静かな季節なのに

真っ黒な夏

最近真夏は空気が淀み
ドブネズミの棲家のように
行き苦しく真黒だ
風の入口が知りたくて
小さい炎を作ると
風洞はどこかに繋がる
腕時計は逆に回り
光は万華鏡のように回転し
眩い時代に投げ出される
これは多分夢だ
夢を見ていた時代だ
体も頭も全く若い
都市も自然も全く若い
人は老いると皆振り返る
あれは夏だった
炎の燃え盛る夏だった

それがいつから
真っ黒になってしまったのか
今一度炎を翳して
めくるめく夏に
投げ出されよう

秋が橋の向こうで

秋が橋の向こうで
私を待っている
けれど私はまだ
橋を渡れない
枯れた向日葵が
夏の終わったことを
私に告げる
早く橋を渡って
秋に会いにゆかなくちゃ
けれど私はまだ
橋を渡れない
秋が橋の向こうで
私を待っている

秋たけなわ

秋にはいつもどこかで
祭り三昧だ
今やらないと秋が逝く
焦らないと木々が枯れる
今だけ謳え踊れ騒げ走れ
酒に溺れよ祭りだワッショイ
祭りは刹那の夢見
誰もが死期の前が一番賑やかだ
全ては振幅
さざ波より大波がよい
花盛りの紅葉もやがて枯れる
万物の必定

いつも秋は竹縄

詩は世界を巡る

いくらなんでも頭が戦争
北半球と南半球が混ざり合って
星座がごちゃごちゃ
昼と夜の回転椅子
流星は雨あられ
風と波の入れ替え
どちらが太陽どちらが月か
夢も現実も分からない
混乱する空間
振幅の輪廻
死期の前のビックリハウス
さんずの川のコークスクリュウ
折角秩序作ってもあっという間の
卓袱台返し
世代は切れる
また一からやり直し
それでいいのかも知れない
それでも少しは進歩するだろう
連綿と繋がることはない
でも記録だけは残しておこう

死後の惑星

皆いなくなってしまった
独り寒い
何で私だけこっち河岸に
反空間という死後
形のないからだ
空洞の意識
時間のない花畑
流れのない川
色のないそら

これが無という時空
一瞬の永遠
単なる点
どうにもならない惑星
一から始める宇宙
どこかで神が嘲笑う

あとがき　北岡冬木

詩人の一生は、少年期と初老期にその創作欲が高まるのではないか。その二つの時期の間に何があるのかといえば、生物学的繁殖期ということになろう。

私の詩作は、１９６５年１５歳時千葉の埋め立てられる前の遠浅の海辺の市立緑町中学校から世田谷区にある国立東京学芸大学付属高校に入学して、そのカルチャーギャップに悩んだ2年生の頃に始まった。。しかし、その芽生えは、千葉市立登戸小５，６年の田辺学級にあったと思う。田辺嘉二先生は当時３０歳前後の溌剌たる教育者であった。当時の公立小学校であるから、様々の階層や能力の児童が一クラス６０人もでクラスを構成していた。しかし、今時の学級崩壊など無縁で、民主的なクラス会を施行し、学力の優劣を補うクイズ形式の補講や表現力を促す文芸ノートの提出など義務付けられ、学力も平均して高かったように覚えている。とくに親友であった古山明夫君（東大の入試がない年に京大理学部に入った天才）が理系のトップだったとしたら私は文系の一翼だったかも知れない。実際このクラスから県立千葉高に１２人進学したと聞く。これは田舎の小学校一クラスとしては大変な数なのである。私はクラス新聞（かもめ、という名で県の何かの展示会で金賞をとったと記憶する）を発行していた私の文章力がこの恩師に高く評価して頂いたことが詩作のきっかけかもしれない。

「蒼い地帯」は1年間の自宅浪人の勉学の合間に書きためたものが主体であり、日本医科大学に入学して、ストライキとロックアウトで授業が無かった期間にデモなどに参加して機動隊に対峙し怖い目に遭い人間いつ死ぬかわからないと思って製本したもので、処女詩集ということになる。
「失速する魚群」は日本医科大学在学中の文芸部所属時に同人誌エリア３９に投稿したものが大半である。ここでは、先輩の詩人後藤正紀氏に出会った。ま

たその後著名になった文芸評論家の柄谷行人氏が顧問および大学の英語の教師をしていた。但し、彼は教官でありながら学生のストライキを扇動し退職されて、法政大の教授に転じた。
だが、このあと２０代前期の多感な頃いろいろ人生の挫折を経験し自分では青春の傑作と思っている数十編の第３詩集を作ったのだが、原稿を紛失してしまったので掲載できないのは残念だ。

その後、当時の過激な学生運動家であり後にドイツや米国で免疫学者になった奇才寒河江光（本名西沢正義）氏（元平成帝京大学教授）と意気投合して演劇や電子音楽に没頭しソ連公演やらレコード制作（１９８１年ＬＰ版疑似技術−テクノイド）を行なったが、さらに形成外科医になり結婚し息子ができたり本業が多忙になりして暫くは詩作は忘れていた。
それが、１９９３年にシドニーに留学することになって、寒河江光氏に国際便での連詩の遣り取りを提案された。まだPCでのメールはできない時期であった。その１年間の再開した詩作の一部が「南十字星の都から」であり、帰国してからの連詩が「１００連詩ごっこ」である。
さいごに、５０代になっての時時書き留めていた小品集と２０代に創作した曲付きの詞を混じえて「懸垂する魚群」を構成したが、５３歳時過労から脳の一部をぶち抜かれ長期入院する破目になったときに、再び人間いつ死ぬか分からないと感じ、病室でしたためた詩が半分くらい占めているのであちらこちらに少年期の夢と死の影が垣間見えよう。しかし人間は強いものでその後また過去のそして現在の聖女を詠うほど復活したのも愛嬌であろう。
いずれにせよ本業の定年を区切りに全詩集を纏めたのがこの冊子である。
尚、寒河江光氏は不治の病の病床において私の詩の評論を書いてくれた。ここに深甚なる謝意を表するものである。

履歴書

きたおか・ふゆき
筆名　北岡冬木（旧・北丘冬志）
本名　百束比古（ひゃくそく・ひこ）
現職
日本医科大学大学院形成再建再生医学主任教授

日本医科大学附属病院形成外科・美容外科部長
資格
医学博士
日本形成外科学会認定専門医
日本熱傷学会認定専門医
日本顎顔面外科学会専門医
日本創傷外科学会皮膚腫瘍指導専門医
日本褥瘡学会認定師

略歴
昭和２５年千葉市に生まれる。
昭和３７年千葉市立登戸小学校卒業
昭和４０年千葉市立緑町中学校卒業
昭和４３年国立東京学芸大学付属高等学校卒業
昭和４４年日本医科大学入学
文芸部、表現芸術研究会、バドミントン部を経て演劇部劇団海創設に参加
昭和５０年日本医科大学卒業・第６０回医師国家試験合格
昭和５１年同皮膚科学教室入局
昭和５３年同第２病院外科にて一般外科学研修
昭和５４年同付属病院形成外科助手
劇団海ソ連公演に同行（制作・音楽担当）
昭和５７年日本形成外科学会認定専門医
昭和５８年長谷部（旧姓）律と結婚
昭和５９年医学博士号取得
長男全人（まと）誕生
昭和６１年同皮膚科学講座講師
平成２年同形成外科学講座新設とともに助教授
平成４年シドニー大学ローヤルプリンスアルフレッド病院客員教授（１年留学）
平成７年日本医科大学形成外科学講座主任教授・大学院教授兼担
日本医科大学附属病院形成外科部長
平成８年中国第一軍医大学南方医院客座（員）教授
平成１１年第２３回日本美容外科学会会長
日本形成外科学会関東支部会長
平成１２年学校法人日本医科大学国際交流センター長
平成１３年第１２回日中形成外科学会会長
平成１４年日本熱傷学会関東支部会長

平成１５年日本医科大学付属病院副院長
平成１５年日本マイクロサージャリー学会副理事長
平成１５年日本美容医療協会理事長
平成１６年中国協和医大名誉客員教授
平成１８年第１回瘢痕・ケロイド治療研究会発起人
平成２０年第１７回日本形成外科学会基礎学術集会会長、
中国東莞康華病院名誉客員教授
平成２１年第１回 Tokyo Meeting on Perforator and Propeller Flap(TMPPF)
主宰（東大形成外科光島教授と共宰）
平成２２年 International Scar Meeting in Tokyo 主宰、日本創傷治癒学会会長、国際美容外科学会（ISAPS）日本支部代表
平成２３年　日本熱傷学会会長、中国広州美菜病院名誉終身教授
平成２５年日本医科大学図書館長
平成２６年日本美容外科学会理事長
平成２７年日本医科大学定年退任